

君は旧制一高を知っているか？

第2部 向丘キャンパス編

絵解き 地図と写真で歩く旧制高校

丹野義彦 (東京大学客員教授)

第1部 一橋キャンパス編

第2部 向丘キャンパス編

第3部 キャンパス交換編

第4部 駒場キャンパス編

<目次>

第2部 向丘キャンパス編 本郷向ヶ丘キャンパス時代の一高

0. 第一高等中学校の向丘キャンパス移転

1. 一高が移ってくる前の向丘
2. 一高へのバーチャルツアー キャンパスの構造を頭に入れよう
3. 一高へのバーチャルツアー キャンパスの南側を歩いてみよう
4. 一高へのバーチャルツアー キャンパスの北側を歩いてみよう
5. 一高へのバーチャルツアー キャンパスの東側を歩いてみよう
6. 一高へのバーチャルツアー 学生寮を歩いてみよう
7. 向丘キャンパスの歴史
8. 今に残る一高向丘キャンパス

0. 第一高等中学校の向丘キャンパス移転

1886(明治22)年9月、文部大臣 森有礼は、第一高等中学校に対して、帝国大学のとなりの向丘キャンパスを与えることを約束した。文部大臣森有礼の名前で「其校を本郷帝国大学隣地に建築す」という通達が出された。

この約束から3年後、1889(明治22)年に、向丘キャンパスが完成し、第一高等中学校は移転した。こうして1862年の開成所以来27年続いた東京大学・一高の一橋キャンパスは幕を閉じることになった。

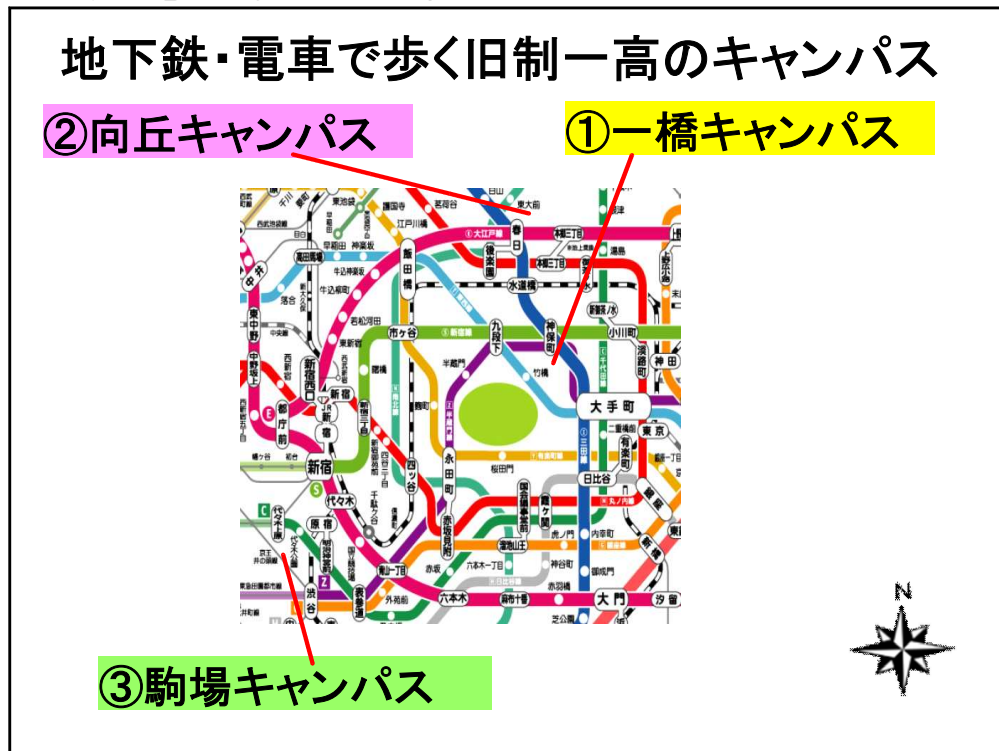
移転した1889(明治22)年に、文部大臣森有礼は、国粋主義者のテロによって暗殺された。英語の国語化を提唱したほどの欧化主義者森有礼の死により、日本の教育は国粋主義へと傾いていくことになる。

新しい向丘に移った第一高等中学校のキャンパスは、3年の時間と莫大な資金をかけて準備された。かなり恵まれていたと言える。その後、第一高等中学校は第一高等学校となり、1935(昭和10)年まで46年間ここにあった。

以下では、第一高等中学校と第一高等学校の両方を合わせて「一高」と呼ぶことにしたい。

また、当時の旧制高校生は「生徒」と呼ばれていたが、ここでは「学生」と呼ぶことにしたい。

地下鉄・電車で歩く旧制一高のキャンパス



一高の3つのキャンパスは、いずれも地下鉄・電車を利用して、簡単に回ることができる。

①一橋キャンパス

地下鉄の神保町駅が近い。この駅は、都営三田線・都営新宿線・半蔵門線が通る。

②向丘キャンパス

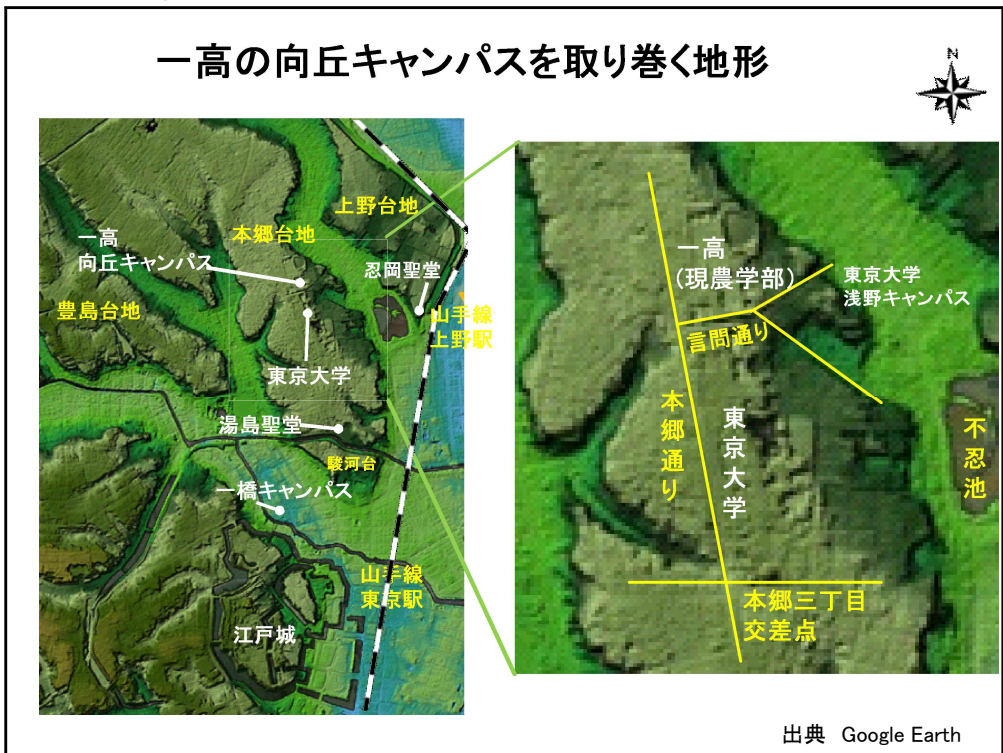
地下鉄丸の内線の本郷三丁目駅、あるいは南北線の東大前駅が近い。

③駒場キャンパス

京王井の頭線の駒場東大前駅からすぐである。

1. 一高が移ってくる前の向丘

1-1. 一高キャンパスを取り巻く地形



一高が移転した向丘キャンパスの地形をみてみよう。キャンパスの周りは起伏に富み、地形を知っておくと、一高のいろいろなことが理解しやすくなるからである。

上野台地と本郷台地

山手線の北東部は、もともとは広い台地だったが、川の浸食によって、左側の地図に示すように、上野台地、本郷台地、豊島台地という3つの台地に分かれた。今の山手線は、上野台地の右側の縁を回るように走っている。一高の一橋キャンパスは、江戸城の北の低地にあったが、向丘キャンパスは本郷台地の上にある。一高は低地から台地へと移動した。このことは、後述のように、学生の意識や文化に大きな影響を与えた。

学問の地 本郷台地

左側の地図に示すように、一高とともに東京大学も、本郷台地の上に乗っている。本郷台地の南側には、江戸時代から湯島聖堂（昌平坂学問所）があった。つまり、湯島聖堂から続く学問の流れは、同じ本郷台地で続いてきたといえる。一高は、このような学問の伝統のある本郷台地に移動したのである。

なお、湯島聖堂の南は、神田川をはさんで駿河台がある。湯島聖堂を中心とする本郷台地と駿河台は、今でも大学の街である。

儒学の聖堂と台地

また、左側の地図に示すように、上野台地には、江戸時代初期に、林羅山の忍岡聖堂が建てられ、これが江戸の儒学の始まりとなった。このように、儒学の中心地は、おもに台地の上に作られてきた。台地の上の聖堂は、学問の雰囲気とマッチしたのだろうか。

上野戦争の悲劇 本郷台地vs上野台地

1868年の戊辰戦争では、向ヶ丘の新政府軍（官軍）と、忍ヶ岡の幕府軍（彰義隊軍）が戦争した。つまり、本郷台地に新政府軍が、上野台地に幕府群が、不忍池をはさんで、陣を張った。これが上野戦争である。見晴らしのよい水戸藩邸（後の向丘キャンパス）には、官軍の砲兵部隊が配置された。絶景はまた軍事上の要所にもなるのである。

一高と東大

右側の地図は、一高と東京大学の周辺を拡大したものである。

本郷通りの東側に東京大学のキャンパスがある。その北に一高の向丘キャンパス（現農学部弥生キャンパス）があった。

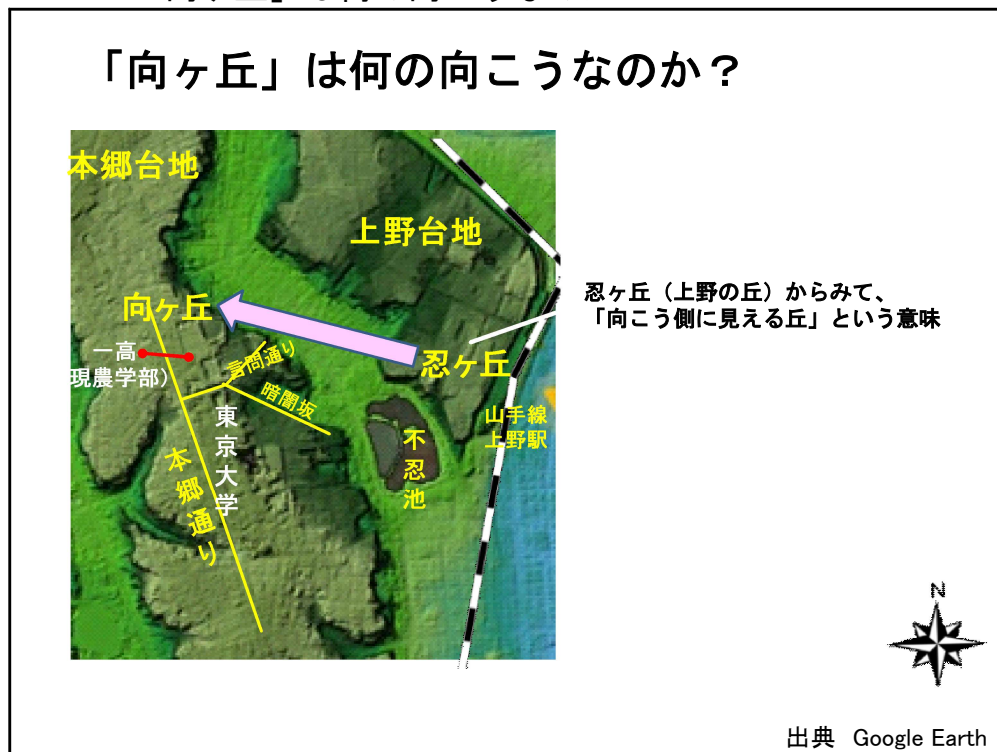
一高と東京大学の間を通るのが言問通りである。言問通りは、途中で「Y」の字のように二つに分かれる。言問通りを東へと降りていくと不忍池へと至る。一方、言問通りを北東に降りていくと、根津神社や根津歓楽街（以前の根津遊郭）のほうに向かう。「Y」の字の間にはさまれるのが浅野キャンパスである。ここが高台になっていて、不忍池が見渡せる。

NHKの『プラタモリ』では、弥生時代の人がこの高台から下の田んぼを眺望しているイメージが出てきた。

この場所からの景観は昔から一等地だった。後に「弥生人、水戸光圀、徳川斉昭、明治天皇、浅野侯爵家が愛した景観」(原、2010)と呼ばれた(後述)。

なお、浅野キャンパスのちょうど南側に四角形のくぼみが見えるが、これは射的場があった場所である(後述)。

1-2. 「向ヶ丘」は何の向こうなのか？



一高の向ヶ丘キャンパス(現東京大学農学部)を本郷通りから見ると、起伏もなく、「丘」という感じはしない。周りに丘らしいものはない。それなのに、なぜ「丘」なのだろうか。

『東京大学本郷キャンパス案内』によると、向ヶ丘という地名は、忍ヶ岡(上野の丘)からみて、向こうにある丘ということでつけられたようだ。

上の地形図をみると、2つの丘の間には、不忍池という低湿地帯がある。忍ヶ岡(上野の丘)から西を眺めると、この低地をはさんで、確かに「向こう」の対岸に見えるのが「向ヶ丘」である。

なぜ一高の周りには丘がないのに、寮歌で「向ヶ丘」と歌われているのか？

有名な一高寮歌『嗚呼玉杯に花うけて』には「向ヶ丘にそそり立つ五寮の健児 意気高し」とあるが、本郷通り側から見ると、この場所が「そそり立つ」ようには見えない。

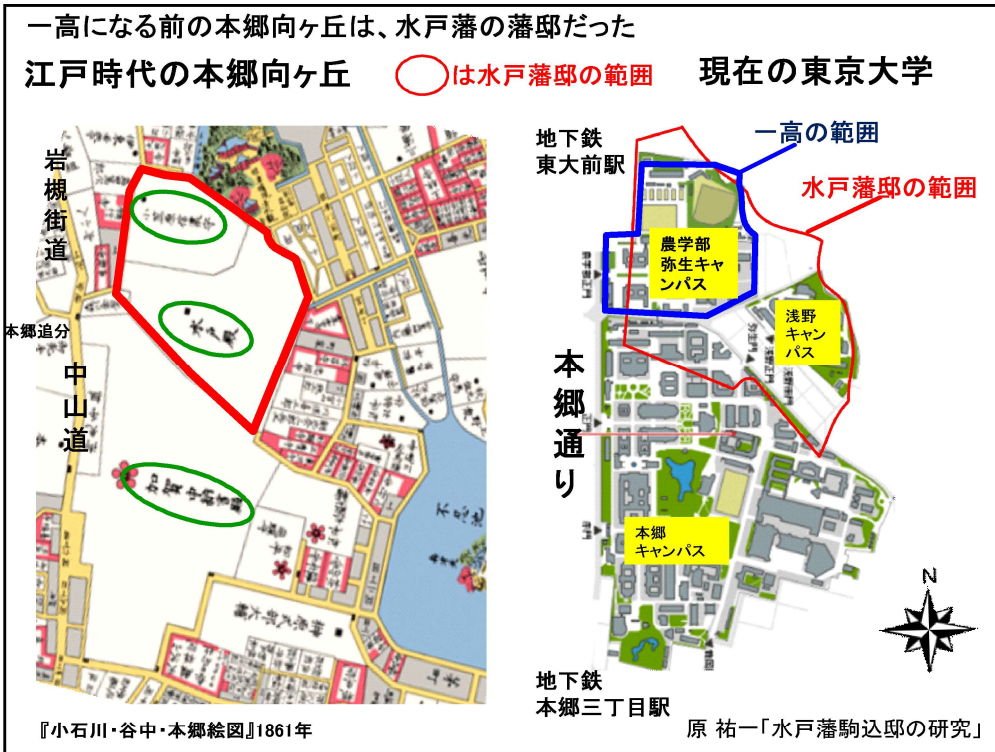
しかし、上の地形図をみればわかるとおり、不忍池から、西北の向ヶ丘を見ると、確かに台地を見上げる形となり、「そそり立つ」ように見えただろう(後述)。

一高と坂道

台地は斜面に坂道をつくりだす。一高や東京大学のある本郷台地にも、多くの坂道がある。暗闇坂、異人坂、S坂、菊坂、解剖坂など、ひとつひとつ名前がつけられ、文学にもよく登場する。

ちなみに、私は学生時代東京大学弥生キャンパスの北側のアパートに住んでいたことがある。本郷キャンパスや弥生キャンパスは、本郷通りから見ると平坦だが、東側には、安田講堂の裏の崖、病院の敷地内の坂など、高低差があった。キャンパスの東側は坂道になっていて、根津や不忍池に行くには坂を下りていく。今回、この記事を書いていて、こうした高低差の構造がよく理解できた。単なる個人的懐古趣味の側面もあるが、一方で、グーグルアースという地図ソフトによって、地形の高低差をひと目でわかるように表せる地図がすぐに手に入るようになったという現代的技術革新の力も大きい(最近の技術で関心するのはドローンで容易に眺望映像を手に入れられるようになったことである)。

1-3. 向ヶ丘キャンパスは水戸藩の藩邸だった



一高が移転した向ヶ丘キャンパスは、もとは水戸藩の藩邸であった。ここに一高が移ってくるまでには面白いドラマがあった。このドラマは、明治という時代をよくあらわしており、一高の学問的な環境を知ろうと役で立つので、見ておきたい。

まず、左の地図をご覧ください。江戸時代 1861 年当時のものである。南側の「加賀中納言殿」と書かれたところは加賀藩の藩邸である。北側には「水戸殿」と書かれた水戸藩邸がある。左の地図の赤い枠で示した部分が水戸藩邸である。「小笠原信濃守」と書かれているのは、安志藩（あんじはん）の小笠原家である。安志藩は今の兵庫県にあった小藩である。1835 年に、水戸藩は、この安志藩の屋敷を取得した。（現在でいえば、地震研究所、野球場、テニスコートの部分である。）加賀藩の西側を南北に走る道は中山道である。中山道は、水戸藩のところ（本郷追分）で左に折れ、直進する道は岩槻街道という。東側には不忍池がある。

当時と現代のキャンパス比較

一方、右の地図は、現在の東京大学である。昔の中山道・岩槻街道は本郷通りとなった。南に地下鉄丸ノ内線・大江戸線の本郷三丁目駅があり、北には南北線の東大前駅がある。

左右を比べると、東京大学の本郷キャンパスは加賀藩邸を利用し、弥生キャンパス（農学部）と浅野キャンパス（工学部）は、水戸藩邸を利用したことがわかる。

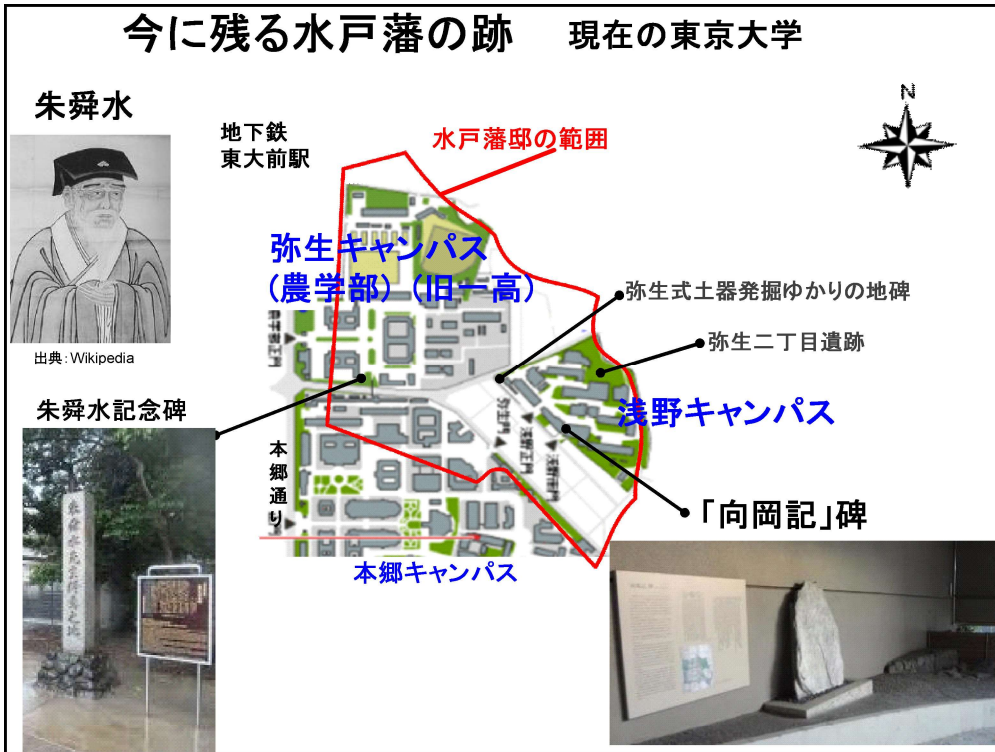
右の地図の青い枠で示したように、第一高等学校は、今の弥生キャンパス（農学部）のある場所にあった。

水戸藩邸は、正確には、右の地図の赤い枠で示した部分である。弥生キャンパスと浅野キャンパスのほとんどを含む。一部は、現在の本郷キャンパスも含んでいる。のちに一高は、水戸藩邸の西側にキャンパスを伸ばし、本郷通りと接するようになった。

なぜ今の東大のキャンパスは広いのか？

なぜ水戸藩邸がここに置かれたのだろうか？ 『東京大学本郷キャンパス案内』186 頁によると、外様大名の加賀藩を監視するために、徳川家の水戸藩邸がとりに置かれたのだという。とすると、今の東京大学のキャンパスがこれほど広いのは、こうした幕府の不信感のおかげかもしれない。結果的に、2つの大藩を合わせた広大なキャンパスを手に入れられたのだから。

1-4. 今に残る水戸藩の跡



水戸藩の遺跡が、今の東京大学に2つだけ残っている。ひとつは朱舜水記念碑であり、もうひとつは、「向岡記」碑である。

水戸学はここで生まれた：水戸光圀の時代

水戸藩の江戸屋敷は、①小石川邸（上屋敷）、②駒込邸（中屋敷）、③目白邸（中屋敷）、④本所小梅邸（下屋敷）などがあった。このうち、②駒込邸がこの東大のキャンパスにあたる。①は、東京ドームの隣にある小石川後楽園にあたる。

駒込邸と深い関係にあるのが、水戸藩の第2代藩主、徳川光圀（1628～1701年）である。光圀は、徳川家康の孫に当たり、水戸黄門として知られる。少年時代は不良だったが、司馬遷の『史記』を読んで行いを改めた。そして、光圀は、『史記』にならって『大日本史』の編纂を始めた。1657年には、この駒込邸に「史局」を作り編纂を始めたのである。のちに、1672年には、「史局」を小石川邸に移し「彰考館」と名づけ、1697年には、彰考館を水戸にも作り、江戸と両方で作業した。水戸黄門のスケさんのモデル佐々十竹（宗淳）や、カクさんのモデル安積澹泊は、彰考館の総裁をつとめた学者である。彰考館の『大日本史』編纂の中から、「水戸学」と呼ばれる学問が生まれた。光圀時代は「前期水戸学」と呼ばれる。一高はこのような学問の伝統の地に建てられた。

朱舜水の儒学と一高

水戸藩邸で活躍した中国の学者が朱舜水（しゅしゅんすい：1600～1682年）である。舜水は中国の明の儒学者だったが、明が滅ぼされてしまったため、1665年に日本に亡命してきた。徳川光圀は、舜水を江戸の水戸藩邸に迎えた。舜水は、彰考館の学者と交流し、『大日本史』の編纂や水戸学に大きな影響を与えた。

東京ドームの隣にある小石川後楽園は、光圀が、舜水の意見を取り入れて改修した庭園である。後楽園という名前も朱の命名である。

朱舜水の故郷である中国浙江省に、景勝地「西湖」がある（現在は世界遺産）。徳川光圀は、この西湖を日本庭園に再現しようとした。小石川後楽園には「西湖堤」があり、水戸には千波湖を西湖に見立てた景観を作った。さらに、光圀は、この駒込邸から不忍池を見下ろす風景が気に入って、不忍池を西湖に見立てて借景とし、庭園を整備した。鎖国の当時、中国の西湖を見た日本人はほとんどいなかったはずで、それを光圀が取り入れたというのは、それだけ朱舜水や中国や儒学に強い憧れを持っていたことを示す。後述のように、駒込邸は、山あり谷ありの起伏に富んだ地形であり、庭園を作るにはもってこいの場所だった。

現在、東京大学の農学部の地図に示す場所に、「朱舜水先生終焉の地碑」が立っている。

碑の説明板によると、舜水は、駒込邸に住み、生涯をこの地ですごしたという。舜水の学風は、朱子学・陽明学の間といえる実学（実行の学）で、空論を避け、道理を重んじたという。

この記念碑は、舜水の日本渡来250年にあたって、1912年に第一高等学校に建てられた。碑文を揮毫したのは一高校長の新渡戸稲造であった。

一高と朱舜水記念碑については、4-6で述べる。

「弥生時代」の命名者 徳川斉昭

第9代藩主の徳川斉昭（1800～1860年）もこの駒込邸を愛した。

斉昭が作った水戸の弘道館は藤田幽谷や会沢正志斎といった学者を輩出し、水戸学（後期水戸学）を確立した。その尊皇攘夷の考え方は幕末の志士に大きな影響を与え、明治維新の原動力となった。斉昭は 53 才で中央政府に呼ばれて活躍した。斉昭の尊皇攘夷政策は、井伊直弼の開国策と対立したが、この政争に斉昭は敗れた。井伊による「安政の大獄」で、蟄居を命じられ、60 歳で病死した。斉昭は将軍徳川慶喜の父である。

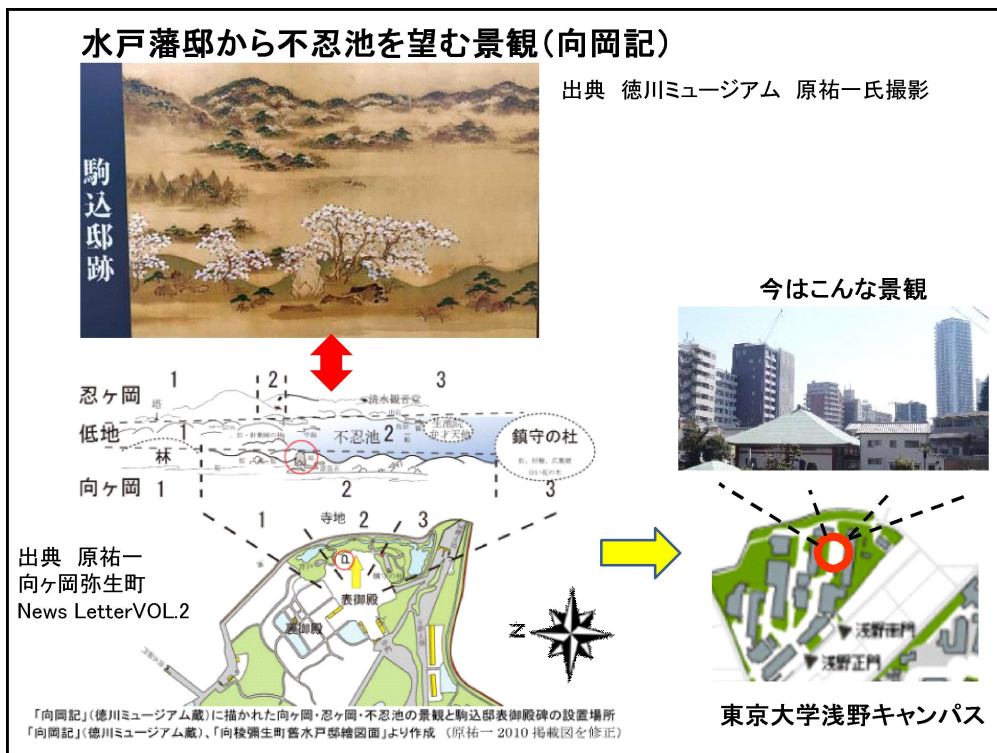
斉昭は、駒込邸から不忍池を見下ろす雄大な景観を愛し、斉昭は、1828 年に「向岡記」碑（むかいがおかきのひ）を建てた。この碑には、この地の説明とともに、斉昭が作った短歌「名にし負ふ 春は向ひが岡なれば 世に類無き 華の影哉」が彫られている。きわめて文学的な内容である。とはいえ、そもそも水戸藩の表御殿など建物は、景観を楽しむ展望台ではなく、南側の加賀前田藩を見張るための監視所であったのはいうまでもない。

この碑は、現在、東京大学情報基盤センターのアーケードに展示され、その説明板とともに、自由に見学できる。上の地図に示すように、浅野南門を入るとすぐである。

この碑で、斉昭は「やよひ」という言葉を使っている。これによって、明治時代になりこの地が「弥生町」と呼ばれるようになった。そして、この地で発見された土器が「弥生式土器」と名づけられ、その時代を「弥生時代」と呼ぶようになった。つまり、結果的に「弥生」時代の命名者は徳川斉昭ということになるので面白い。

地図に示すように、浅野キャンパスには、「弥生式土器発掘ゆかりの地碑」や「弥生二丁目遺跡」がある。

1-5. 水戸藩邸からの景観 いまむかし



以下は、東京大学埋蔵文化財調査室の原祐一氏による次の論文と web で発信している情報に負うところが大きい。

文献：原 祐一（2010）「水戸藩駒込邸の研究 藩邸内外の景観と造園の検討」東京大学史紀要、28、41-63。

徳川斉昭の「向岡記」

徳川斉昭は、駒込邸の庭から見える景観を愛し、『向岡記』という庭園図を書かせている。これは現在、水戸にある徳川ミュージアムに所蔵され、パネルが展示されている（左上の写真）。パネルの説明には、「蟄居前の 9 代斉昭公はここで窯を築いて、お庭焼を楽しんだ」とある。

この庭園図には、左中の図のように、不忍池や対岸の忍ヶ岡が描かれている。よく見ると、ほかにも上野寛永寺、清水観音堂、東照宮などが書かれていることがわかったのである（原、2010）。方角は左が北である。

さらに、原（2010）は、左下の図に示すように、駒込邸からの眺めの角度も分析した。緻密で面白い分析である。この図からも、前述のように、向ヶ丘が、不忍池をはさんで、対岸の忍が丘と対峙していることがみてとれる。

水戸藩の表御殿のある高台は、ちょうど「鳥の頭」のような形をしている。この高台が、のちに浅野侯爵邸や東京大学浅野キャンパスへと受け継がれいく。

原（2010）は次のように指摘する。壮大にして名文である。

「旧石器人、縄文人、弥生人、歴代水戸藩主、明治天皇、浅野家の楽しんだ忍ヶ岡、不忍池の景観は、…東

京大学の研究棟建設によって一瞬にして消滅」した。

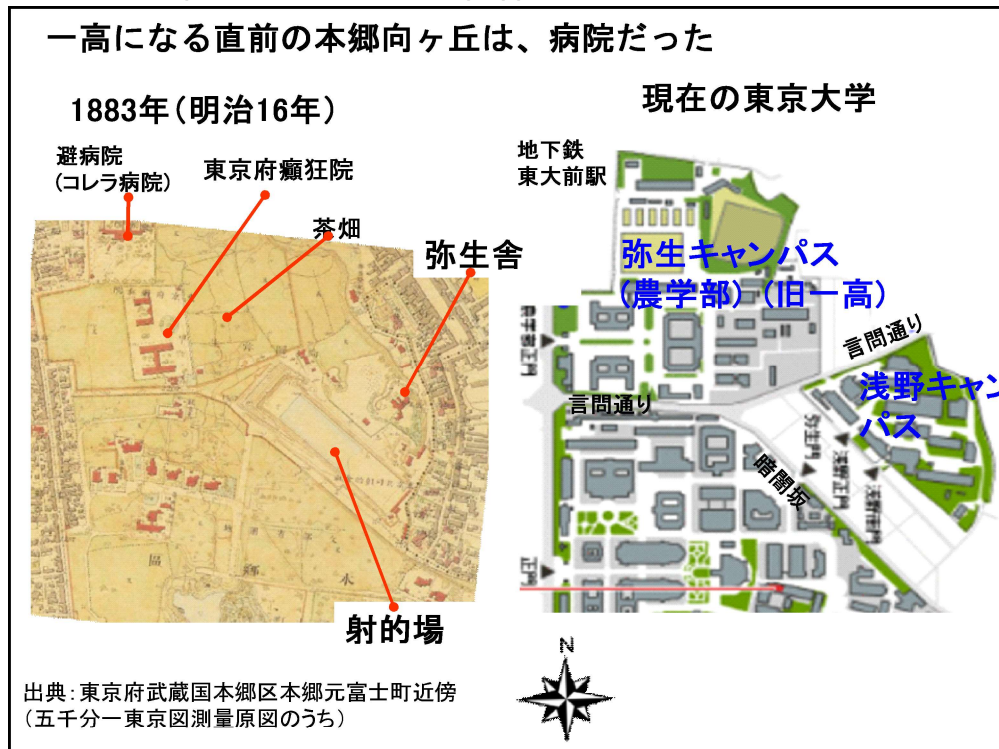
現在の眺望

駒込邸からの景観は、現在でいえば、東京大学浅野キャンパスの理学部3号館の前あたりということになる。しかし、そこに行ってみても、残念ながら、不忍池は見えない。右上の写真に示すように、あたりは高層ビルが建ってしまい、地形は全くわからなくなっている。

「向岡記」碑の行方

「向岡記」碑は、浅野侯爵邸を経て（後述）、東京大学浅野キャンパスに受け継がれたが、研究棟建設のたびに移動し、碑の前はゴミ置き場となり、忘れ去られてしまったという。2008年になって、東大が創立130周年「知のプロムナード」のプロジェクトをたちあげたことにより、やっと注目され、保存されることが決まった。今は、前述のように、情報基盤センターのアーケードに展示されている。碑ひとつにもいろいろなドラマがある。

1-6. 一高のキャンパスは精神科病院だった



明治政府の軍事と外交

明治維新を迎えると、水戸藩邸は明治政府に没収され、いろいろな目的に使われていく。

左の地図をご覧ください。これは1883(明治3)年のものである。この地図をよくみると、北側の病院の周りには、「茶畑」や「桑畑」と書かれている。1869(明治2)年に政府に没収された後、政府の命令で、水戸藩士たちはここを畑にして、茶や桑を栽培していたのである。

次に、水戸藩邸の東側の土地は、警視庁のものになり、1877年には、射的場(警官の軍事演習場)が作られた。1877年には西南戦争がおり、警官の軍事訓練が必要になったのである。ここで訓練された警官は、西南戦争に派遣された。左の地図の真ん中あたりに「東京共同射的会社」と書かれているのが射的場である。前述の1-1で示した地形図では、射的場のあたりは、台地の突端にはさまれた四角の窪地になっており、射的場そこにすっぽり治まるように作られた。

また、地図の東側には「弥生舎」という建物がある。これは警視庁が建てた迎賓館である。射的会がおこなわれると、ここに明治天皇が行幸し、海外の公使や明治政府の要人が招かれた。来客たちは、この弥生舎から下忍池を望む景観を楽しんだのである。「弥生舎」はちょうど水戸藩邸の庭園だった場所にある。徳川斉昭が愛した景観がそのまま弥生舎に受け継がれ、明治政府の外交に利用されたのである。

なぜ病院は移転したのか：東京府の健康政策

一方、地図の北側には、「避病院」と「東京府癲狂院」がある。水戸藩邸の西側の土地は、東京府のものとなり、避病院(コレラ病院)と東京府癲狂院(精神科病院)がつくられたのである。こちらは東京府の健康政策の場となったのである。

癲狂院(てんきょういん)とは精神科病院のことである。東京府癲狂院は、現在の松沢病院の前身である。1879年に上野に建てられ、1881年に向ヶ丘のこの地に移転した。しかし、近くの射的場の騒音が大きく、弾が飛んでくる危険もあったので、1886年に、小石川駕籠町に移ってしまった。たしかに病院の隣に軍事

演習場があつては、かえってストレスが強くなってしまうだろう。こうして、病院は、1881～86年の5年間だけここにあった。東京府癲狂院は、のちに巢鴨病院と名前を変え、今は松沢病院に受け継がれている。

また、避病院とは伝染病専門の病院のことである。『明治の避病院—駒込病院医局日誌抄』（磯貝元編、思文閣出版、1999）という本によると、東京で1879年に流行したコレラの患者を収容するために、避病院が作られた。常設である本所病院が満床になると病舎を急造し、流行が終わると解体された。この地図にある避病院は、そうした臨時のものであり、のちに解体された。ちなみに、1910年の統計では、致命率はコレラ40.7%、赤痢21.9%、腸チフス30.9%だったという。

このように、水戸藩邸の跡地は、日本の精神医学や感染症医学の発祥の地ともなったのである。

射的場はなぜ移転したか

のちに射的場は撤去されることになった。西南戦争が終わって軍事演習も必要なくなったのである。射的場は、宮内省主催の射的会の会場として使われるようになり、むしろ「弥生舎」での外交の場として使われるようになった。

1887年に、警視総監三島通庸と浅野侯爵家で話がまとまり、弥生舎と射的場は浅野家に譲られることになった。水戸藩主や天皇が愛した景観は、今度は浅野家に引き継がれたのである。

1888年に、射的場は大田区に移った。

ちなみに、浅野侯爵邸は、第2次大戦中に、東京大学に売却された。このあたりが浅野キャンパスと呼ばれるのは浅野家の名前をとったものである。

こうして一高が移転してきた 軍事→外交→健康→教育

こうして物騒な射的場もなくなり、静かな場所になった。そこで、第一高等中学校の敷地を探していた森有礼の目にとまったに違いない。病院の跡地を利用して、第一高等中学校のキャンパスとなり、校舎が建設された。1889年に第一高等中学校は、完成したばかりのキャンパスに移ってきたのである。この地の用途は、軍事→外交→健康→教育の場と移り変わった。

左の地図と、右の現代の地図をくらべてみよう。

この頃には、藩邸の形を保ちつつも、今の東京大学の敷地とほぼ同じものになっている。現在では、言問通りと暗闇坂がちょうど横Yの字型をなしている。当時は、言問通りはまだ完成していないものの、Yの字型の境界線はすでに見られる。言問通りの西側の部分は、明治時代になってから新たに切り開かれた。

南側は東京大学の本郷キャンパスとなり、いくつかの建物がある。しかし、建物の配置は現在とは全く違っている。

2. 一高へのバーチャルツアー キャンパスの構造を頭に入れよう

2-1. 1894(明治27年)の第一高等学校 現代との比較



出典:『向陵誌』

出典 東京大学ホームページ

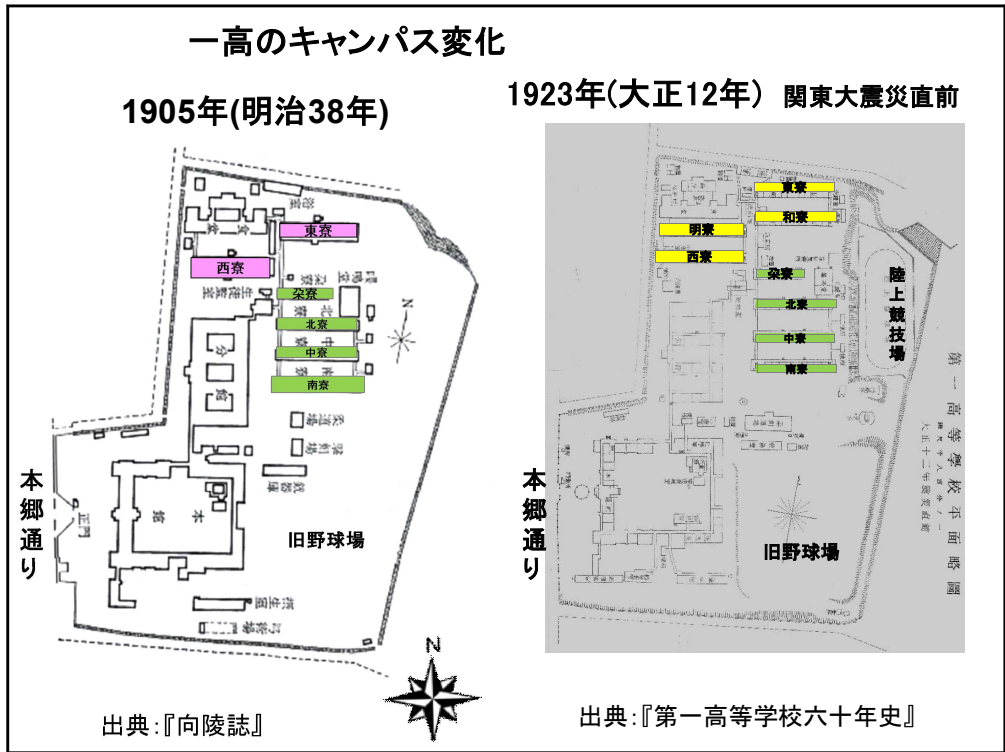
当時の一高はどのようになっていたのだろうか。時空を越えてバーチャルツアーに出かけてみよう。上の図の左側は、1894(明治27)年の一高のキャンパスである。第一高等学校と改称した年である。前述の1883(明治16)年の地図(1-6)と比べてみよう。東京府癲狂院の敷地が本館や旧野球場となり、避病院の敷地が分館や学生寮となっていることがわかる。病院の広い敷地を利用して、病院の建物を取り壊して、最初から立派なキャンパスが作られたことがわかる。学生寮は4棟ある。キャンパスの北側に「西寮」と「東寮」があり、東側の敷地外に「北寮」と「南寮」がある。この東側の飛び出た部分は、一高の土地ではなく、東京校舎会社という会社から借りていた土地であり、1900年に会社に返却した。分館の東側には、摂生室(保健室)がある。また、銃器室、射撃場、柔道場が作られている。当時の旧制高校には軍事教練があり、それに使う武器が銃器庫に保管されていた。さて、右側の図は、現在の東京大学弥生キャンパス(農学部)である。左右を比べてみよう。キャンパス全体の形はほぼ同じであることがわかる。ただし建物の配置は全く違っている。次のように対応づけることができる。

表 一高と現在の東大弥生キャンパスの施設対応

1894年の一高	現在の東京大学弥生キャンパス(農学部)
本館、理系校舎	農学部1・2号館
旧野球場	農学部3号館などのビル
分館	グラウンド
西寮・東寮	地震研究所
—	新野球場
北寮・南寮	圃場

現在、農学部の東側には圃場(大学の農場)の敷地がある。これは、ずっと後の1928年に、民有地約4,000坪を一高が買い上げたものである。

2-2. 第一高等学校のキャンパス変化



1905年の一高のキャンパス

左側の地図は、1905(明治38)年のキャンパスである。前述の1894年の地図(2-1)とくらべてみると、本館や分館の位置は変わらないが、学生寮は大きく変わっている。

前述のように、敷地外にあった「北寮」と「南寮」は人気なかった。1900年に北寮と南寮のリース期限が来たので、壊された。かわって、構内に新たに「北寮」と「南寮」と「中寮」が建てられた。これによって東西南北中の「五寮」となった。さらに、1905年には、新たに「南寮」が作られて、「六寮」となった。南寮は「だりょう」と読む。乃木希典将軍にちなんだ当て字である。

新寮の場所にあった養生室(保健室)、銃器室、柔道場、射撃場は、別の場所に移されている。

また、おもな建物は、渡り廊下でつながられ、便利になっている。

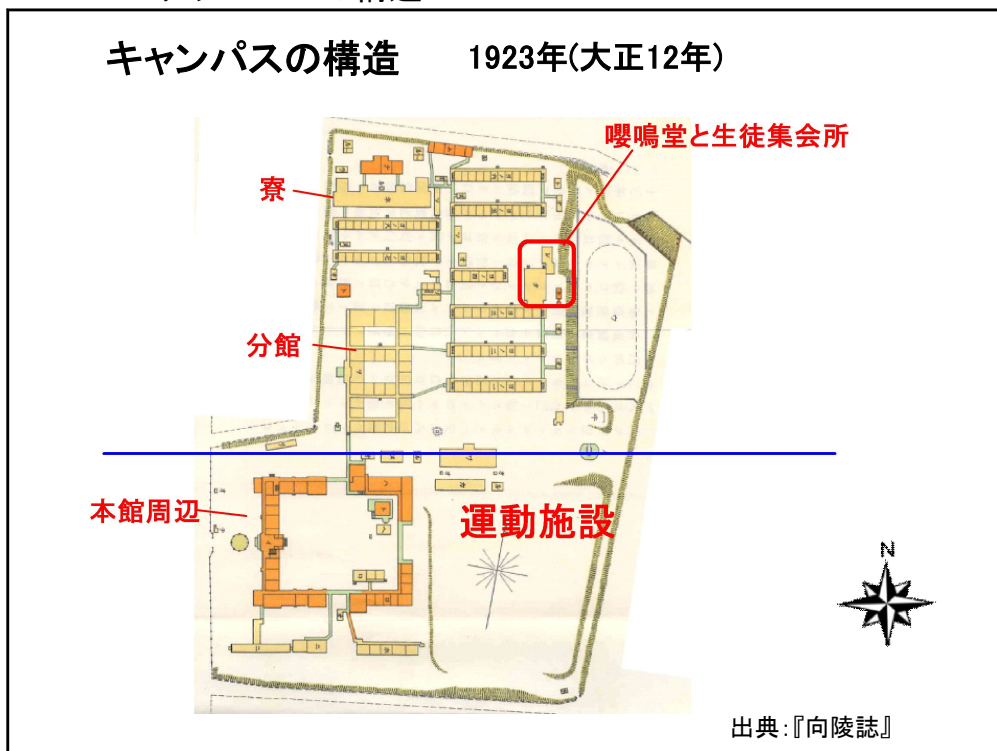
1923年の一高のキャンパス

右側の地図は、その18年後の1923(大正12年、関東大震災直前)のキャンパスである。

寮の数はさらに増えている。古い東寮と西寮は、一度取り壊されて、東寮・西寮・和寮・明寮が作られた。こうして、1920年には「八寮」となった。

キャンパスの北東には陸上競技のトラックが作られた。また、南西に動植物室が建て増しされている。

2-3. キャンパスの構造



上の図は 1923 (大正 12 年) の一高のキャンパスである。この時代の一高のバーチャルツアーに出かけてみよう。

キャンパスは、大きく 3 つに分かれる。南側に教室があり、北側に寮、東側に運動施設がある。

南側の教室は、南西部の本館周辺と、その北の分館からなる。また、寮の東には、嚶鳴堂 (おうめいどう) と生徒集会所がある。

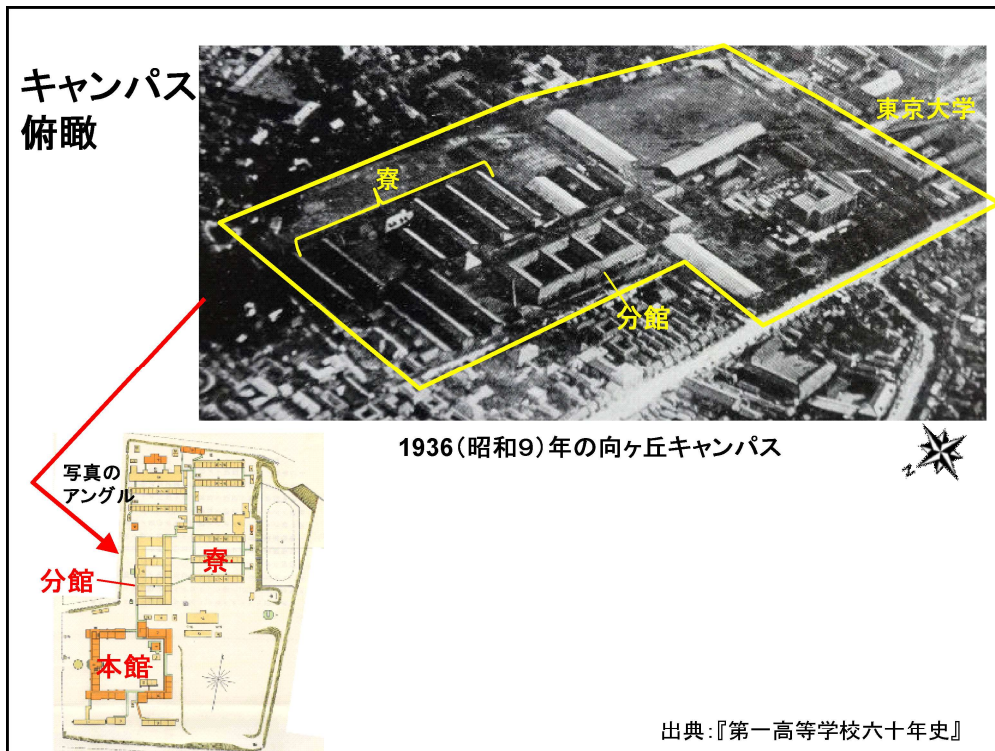
なお、この図でオレンジ色で塗られた建物はレンガ造りで、黄色で塗られた建物は木造である。この図からわかるように、本館の周辺だけレンガ造りであるが、それ以外の分館や寮は木造である。

以下、順に歩いてみよう。

なお、以下の当時の写真の多くは『向陵誌』からの引用である。

当時の写真を何回も眺めたり、ランドマークなどから推理していくと、キャンパスのどの場所でどのアングルで撮影されたかが特定できるようになる。これはなかなか面白く、発見的な作業である。

2-4. キャンパス鳥瞰



この写真は、1936（昭和9）年のもので、キャンパスを北東から俯瞰したものである。

1935年に農学部とキャンパスを交換したので、この時は農学部のキャンパスとなって1年後である。それでも一高の木造の建物（分館と8つの寮）はそのまま残っていることがわかる。

分館は、漢字の「目」の字の形をした建物である。その左下にある煙突は、後述のように、「分館横の煙突」である。

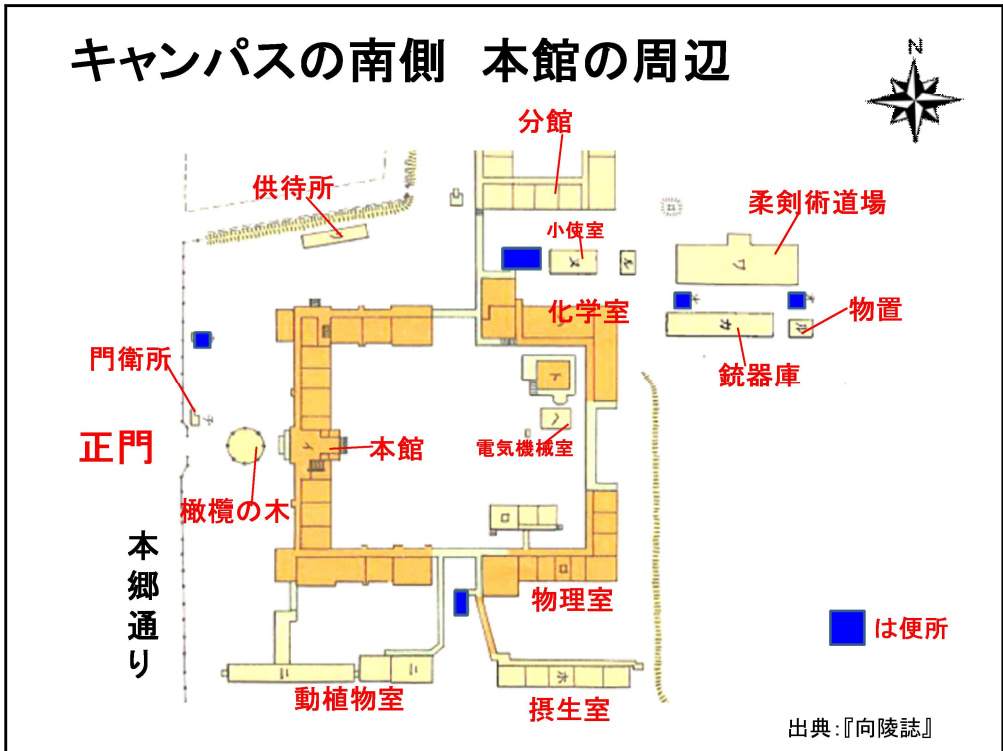
また、8つの寮の長い屋根もきれいに見える。寮の中心にある三角屋根の建物が寮務室である。

本館は、関東大震災で破壊され、跡地にはすでに農学部1号館が建っている。また、東側の陸上競技場のグラウンドや、運動場もそのまま残っている。

南側は東京大学のキャンパスである。

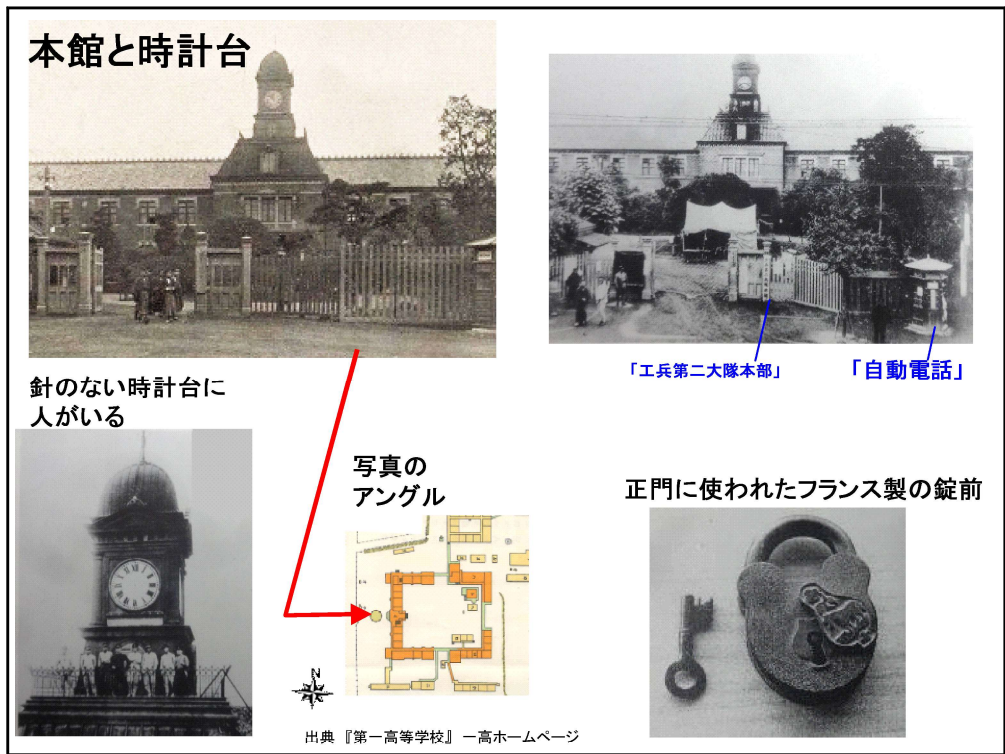
3. 一高へのバーチャルツアー キャンパスの南側を歩いてみよう

3-1. キャンパスの南側を歩いてみよう



まず、キャンパスの南側から歩いてみよう。
正門の西側は本郷通りである。正門の横に門衛所がある。
正門の正面に、本館の正面玄関がある。正門と玄関の間には、檜欖（かんらん）の木がある。
本館は、上から見ると、[の形をしている。それに対応して、西側には化学室と物理室が] の形で並んである。これらが合わさって、[] の形をなしている。その間に中庭がある。
その南には、動植物教室と摂生室（保健室）がある。
本館の北側に、分館がある。そのまわりに供待室、小使室がある。
本館の東側には、柔剣術道場、銃器室があり、その東には広いグラウンドが広がっている。
便所（青色）は屋外のあちこちに設けられている。教室と寮はすべて渡り廊下でつながっている。
以下、ひとつひとつ歩いてみよう。

3-2. 本館と時計台



本館の外観

正門を入ると、正面には本館がある。左上の写真は、1889（明治 22）年の移転直後である。本館はレンガ造りの2階建てである。屋根は瓦である。正門から出てくる学生たちが写っている。

右下の写真は、正門に使われた錠前である。フランス製とのこと。

関東大震災で爆破が決まった時計台

右上の写真は、同じアンゲルからみたもので、1923（大正 12）年の関東大震災の直後の写真である。正門の横には「工兵第二大隊本部」という看板が立っている。時計台を爆破するために、陸軍の工兵隊が入って準備を進めているところである。正門脇には、兵士が立っている。玄関前の檜の木の前には、白いテントが張られており、中で兵士が座って警備している。時計台の上には、よく見ると、白い制服を着た学生たちが立っているが、これは時計台に名残を惜んでいる学生たちなのである。

なお、正門の横に、八角形の小さな建物が見えるが、ここには「自動電話」と書かれている。工兵隊が設置した連絡用か、あるいは公衆電話ボックスかもしれない。

ランドマークの時計台

時計台は、とても目立ち、一高を象徴する建物である。キャンパスのランドマークとなっている。

建物を設計したのは、文部省の技師であった山口平六と久留正道である。彼らは一高から五高までの旧制高校の校舎など、多くの官立の学校を設計した。

針のない時計台に人がいる

左下の写真は、時計台を拡大したものだが、ここにも白い制服を着た学生たちが立っている。よく見ると、時計の針がない。なぜかという、これから時計台が爆破されるので、針が撤去されたからである。時計台は関東大震災で破損したために、爆破されたのである。爆破直前に、記念として学生が時計台に登ることを許された珍しい写真である。

3-3. 関東大震災の被害による時計台爆破(1923年)



1923（大正 12）年 9 月 1 日に関東大震災がおこった。これにより一高と帝国大学の建物は、壊滅的な被害を受けた。レンガ造りのビルが多いため、それらの多くが倒壊した。

一高でも、時計台のある本館が半壊してしまい、そのままでは危険なので、10 月にはそれを爆破・解体せざるを得なかった。右の写真は、本館が爆破解体される瞬間をとらえた貴重なものである。時計台の爆破は、工兵隊によって、情け容赦なく冷酷に進められた。

左の写真は、爆破されて瓦礫となった時計台である。

当時の菊池寿人校長は、10 月 22 日に、声涙下る報告演説をしたという。「諸君、吾輩もあの本館が落成した当時の生徒のひとりであります。それから教授となり校長となって、あの時計台をくぐること前後 30 年、自分の生まれた家に於けるより久しいのであります。したがって愛惜の念はあえて人に譲らないが、学校将来のためには思い切らねばならぬ」

一高の象徴である時計台に愛着を持っていた一高生たちは、意気消沈した。

時計台の持つ意義：一校一時計台というポリシー

当時の大学や高校のキャンパスでは、時計台が象徴的な意味を持っていた。時計台は、今では単なる飾りのようにしか見えないが、実は一高・東大の歴史とともに歩んだドラマがある。

旧制の大学や高校では、時計台というものが象徴的な意味を持っていた。明治・大正時代の東京帝国大学本郷キャンパスでは、医科大学や工科大学など何本かの時計台が立っていた（ちなみに当時の医科大学の建物は、現在、小石川植物園に移築されて現存する）。当時は、それぞれに分かれた分科大学が、自律性を主張するためにそれぞれ時計台を建設したのである（『東京大学本郷キャンパス案内』80 頁）。

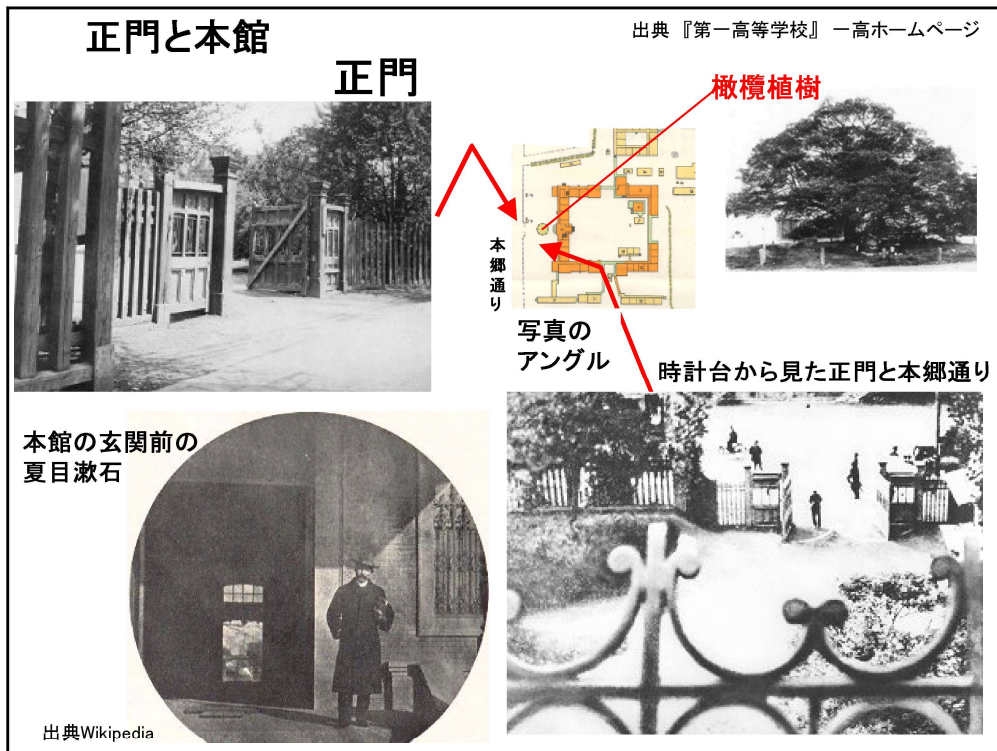
一高にも時計台が作られた。時計台を作ってもらったことは、一高にとって、東京大学とは独立した学校であることを認められたことを意味しており、とてもプライドがくすぐられることであった。

ところが 1923 年の関東大震災で一高の時計台は破壊された。このことは、一高の存在意義を失うほどの大きな象徴的な損失だった。

キャンパス復興を担った営繕課長の内田祥三（後に総長）は、東京帝国大学を各学部を統合した総合大学として構想したため、本郷キャンパスには安田講堂ただひとつに時計台を作り、それを東京帝国大学の統合のシンボルとした。ひとつの大学に自律性を主張する複数の時計台があるのはおかしいというのである。

その後、一高と農学部はキャンパス交換をおこない、一高は駒場の地に移った。一高の新キャンパスも設計した内田祥三は、駒場にも時計台を作り、東大と一高は別の独立した学校であることを強調した。安田講堂と 1 号館の時計台が似ているが少し違うのはこのためである。当時の移転を反対していた一高生たちは、震災で破壊された時計台が駒場に再建されることに大きな意義を見いだして、キャンパス交換を認めたのである。

3-4. 正門と本館



正門

本郷通りに面して、正門があった。木製の四角柱が4本立っている（左上の写真）。柱の上には、四角形の飾りが乗っている。表札には「第一高等中学校」と書かれている。

現在も同じ位置に、東京大学農学部の正門が立っているが、こちらの門柱は石でできている。この石の門になったのは一高と農学部のキャンパス交換後の1937年のことである。

右下の写真は、時計台から見た正門と本郷通りである。正門の右側に門衛所が見える。正門を通して、学生たちがキャンパスに出入りしている姿が映っている。後述のように、当時の本郷通りには市電が走っていた。手前に写っている波形の模様は、時計台の外についている手すりである。3-2の左下の写真をよくみると、この波形の模様の手すりがついているのがわかる。

正門主義

当時の一高では、「正門主義」がとられた。大正期の寮の決まりには「正門以外より出入スベカラザルコト」とある。それは、いかなる場合でも正道を行くという「正門主義」の精神的姿勢をあらわすものになった。

キャンパスに裏門があったが（後述）、それを使わず、遠回りしても正門を通った。

こうなった背景には、裏門の方向には根津の歓楽街があり、学生をそこに向かわせないためだったという（『向陵誌』）。江戸時代には、根津神社の門前に根津遊廓ができたが、明治時代には東京帝国大学の近くにあることが問題となり、1888年に遊郭は洲崎へ強制移転させられたという。

後述のキャンパス交換の時は、一高生が正門主義を貫こうとしたため、農学部の人は出入りに苦労したという。

橄欖（オリーブ）の木 一高との長い歴史

本館の前には、橄欖（かんらん）の木、すなわちオリーブの木が立っていた（右上の写真）。

この木には、今に続く歴史がある。このオリーブの木は、一高の教頭の斉藤阿具（さいとうあぐ）がヨーロッパから持ち帰ったものである。斉藤阿具（1868～1942年）は、第一高等学校の教授で教頭を勤め、退職後も講師として死去するまで一高で教鞭をとった。斉藤も一高の卒業生であり、夏目漱石と同期である。斉藤は、一高に着任する前に、ドイツやオランダに留学し、帰国時にこのオリーブの苗木を持ち帰った。この苗木は、千駄木の自宅に植えられていたが、のちに向丘キャンパスの本館前に植えられた。一高が駒場に移転した時に、このオリーブの木も駒場に移植された。現在でも、東京大学駒場キャンパスの1号館の前には、このオリーブの木が植えられており、木の前には解説板もある。石碑もあり、表面には『橄欖』と書かれ、裏面には「昭和八年教授齋藤阿具寄贈」と書かれている。文字は齋藤の自筆である。

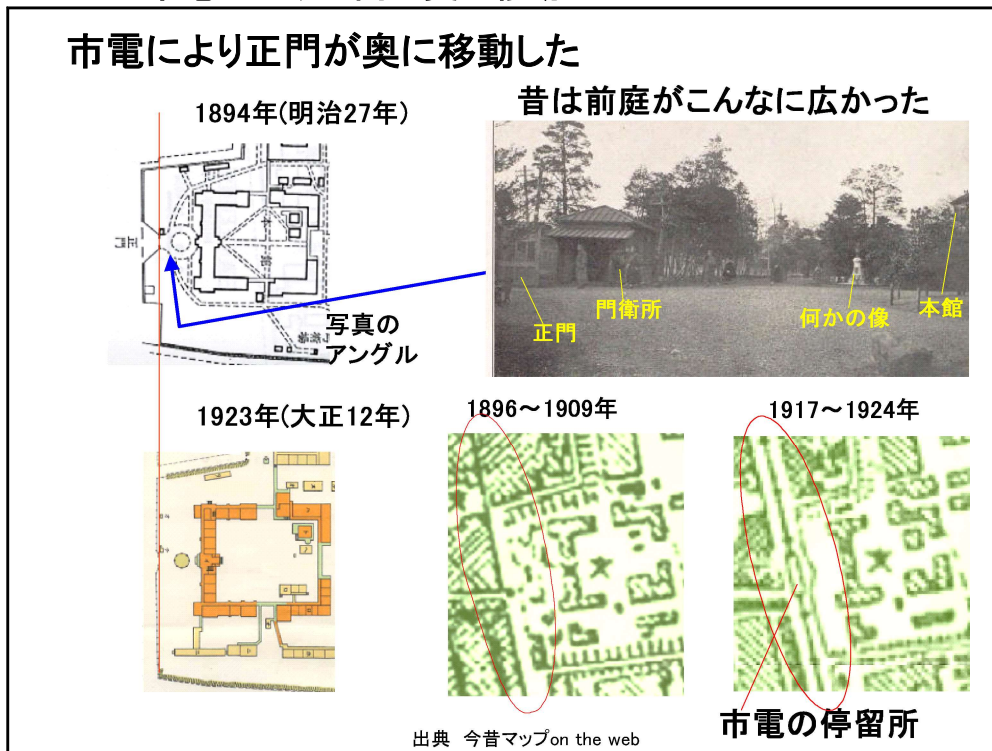
本館の玄関

本館の玄関は、橄欖の木のために、よく見えないが、左下の写真は、本館の玄関を写した貴重な写真である（出典：Wikipedia）。しかも、前に立っているのは、一高の英語講師であった夏目漱石である。

この写真から、本館の窓枠の形がわかる。また、正面玄関に入ると、向こう側は吹き抜けになっていて、

中庭が見通せることもわかる。

3-5. 市電により正門が奥に移動した



左上の1894(明治27年)の地図と、左下の1923(大正12年)の地図を比べると、正門のあたりが少し変わっている。1894年には、正門と本館の間に広い前庭があり、ロータリーがあった。

右上の写真のように、1894年には、前庭がかなり広がった。前庭には、何か像も立っていた。

ところが、1923年には、前庭が狭くなり、ロータリーがなくなっている。つまり、この間に、一高のキャンパスが少し削られて、正門の前の三角形の敷地が削られている。2つの地図をタテに並べて、赤い線を引いてみると、10メートルくらいは削られたようである。つまり、正門の位置が、奥に10メートルほど移動したようである。

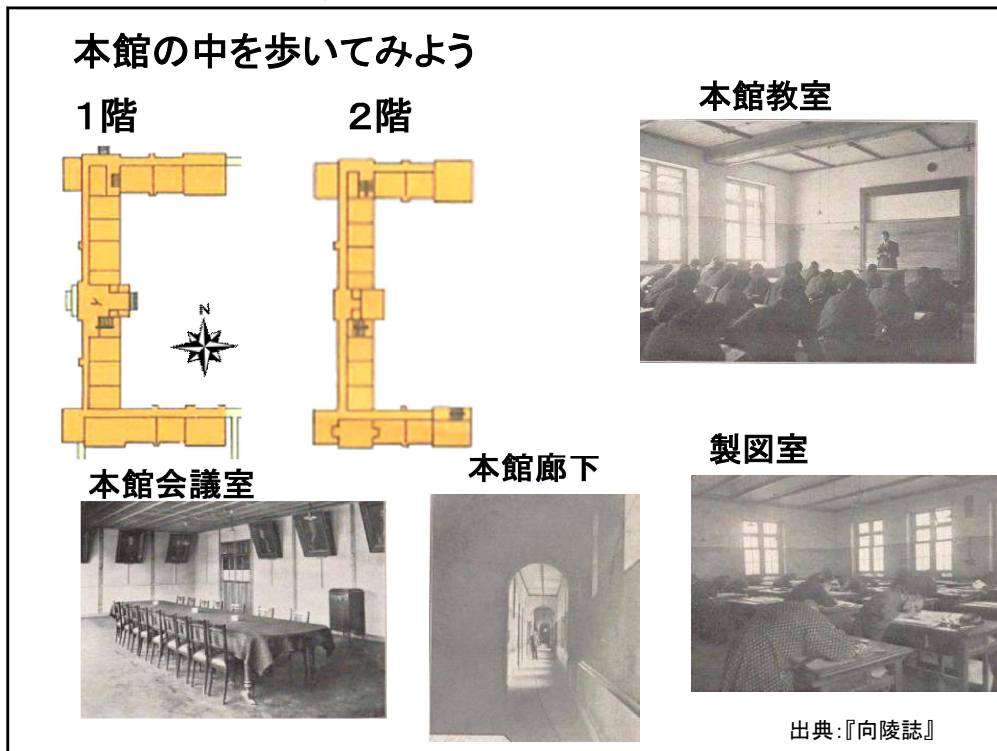
都市計画と市電

なぜ土地が削られたのだろうか。おそらく市電が通ったためと考えられる。

右下の2枚の地図は、左が1896~1909年のもので、右が1917~1924年のものである。左の地図では、本郷通りは、道の幅が不規則である。一高の前は広いが、その北はかなり狭い道になっている。

これに対し、右の地図の本郷通りは、幅広い大通りに変わっており、しかも市電が通っている。一高の正門前には、電車の停留所も書かれている。つまり、1909年~1917年の間に、本郷通りが広がって、市電が通ったわけである。こうした本郷通りの拡幅という都市計画によって、一高の土地が削られたのかもしれない。現在の本郷通りは4車線であるが、この幅はこの当時にできたようだ。

3-6. 本館の中を歩いてみよう



本館の中はどうなっていたらだろうか。1階と2階に分けて示してある。

1階は、正面玄関を入ると、広いロビーがある。前述の夏目漱石の写真からわかるように、ロビーの向こう側は吹き抜けになっていて、中庭が見通せる。ロビーの右側に階段がある。

左右に廊下が伸びている。下中の写真は、廊下である。レンガ作りの建物なので、天井が高く、床は光っている。

廊下に面して、1階に14部屋、2階に16部屋がある。

本館1階

各部屋の用途については資料がないので、他の旧制高校の配置から推測するしかないが、おそらく1階には、教官室や校長室や事務室などが並んでいたであろう。左下の写真は、本館にあった会議室である。歴代の校長の肖像画が飾ってある。

本館2階

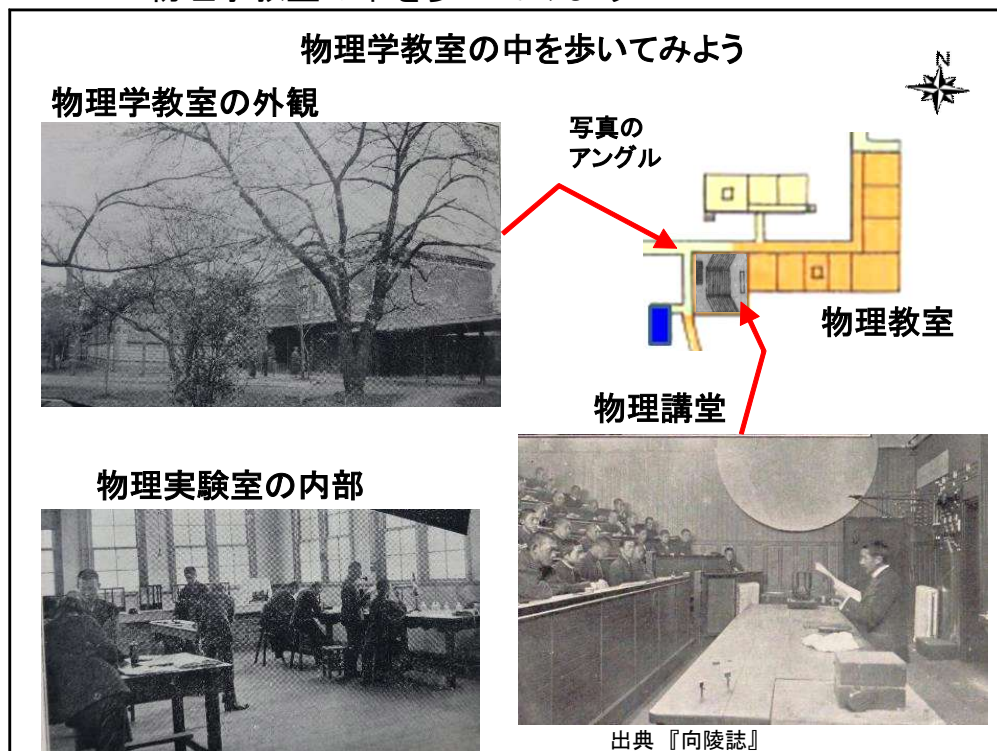
2階には、おそらく教室が並んでいた。

1～2年生は、後述のように、分館に教室があった。3年生は本館の2階に教室があったと思われる。左上の写真は、本館の教室である。天井が高くて、窓も上下に大きく取ってある。

(これに比べて、分館は、後述のように、木造平屋で、天井も低く、窓も小さい。1・2年生は、早く3年になってレンガ造りの本館の教室に移りたいと思ったであろう。)

製図室(写真右下)も、おそらく2階にあったと思われる。

3-7. 物理学教室の中を歩いてみよう



本館と対峙するように、東側には理系の教室がある。南が物理学教室で、北が化学教室である。

旧制高校は理系の教室にもかなり力を入れていた。文明開化の時代に、西洋の自然科学を学ぶことに大きな意味があった。後述のように、自然科学の人材も輩出している。

左上の写真は、本館時計台の方から見た物理学教室である。レンガ造りの平屋の建物である。手前の物理講堂は、2階建てのように見えるが、天井が高い造りであり、平屋である。

平面図からわかるように、物理学教室の北側の中庭には、小さな教室が建っていた。

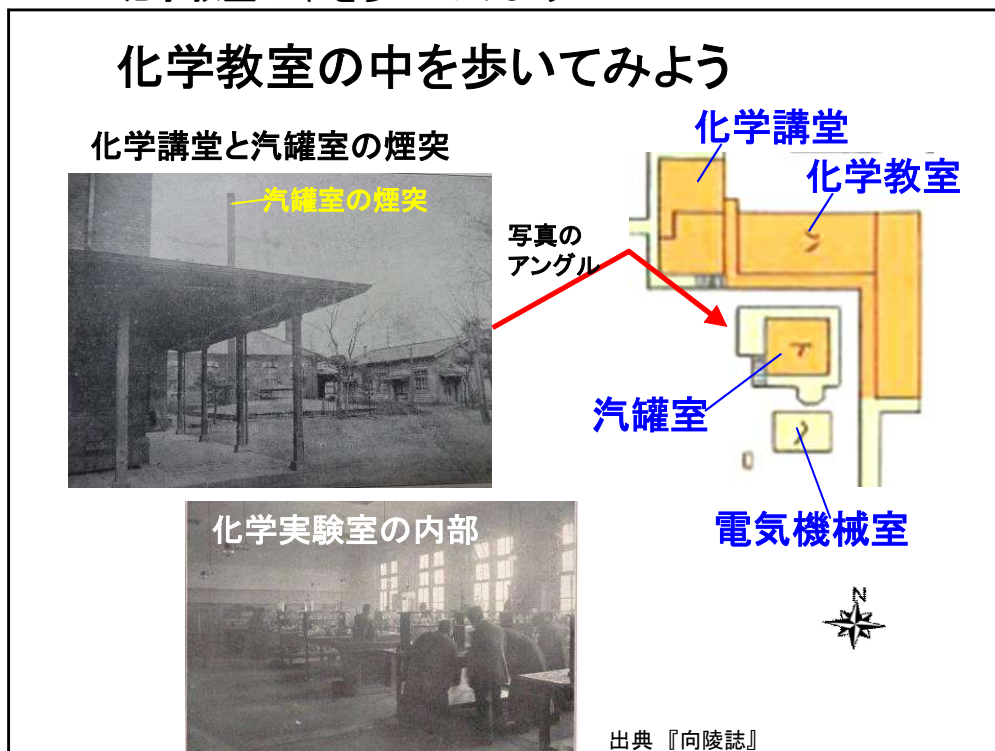
物理講堂

最も本館に近い部屋は、物理講堂と呼ばれていた。階段教室になっていた。右下の写真は、その内部である。学生たちが階段教室にびっしり座って、教師の話を熱心に聞いている。

物理実験室

左下の写真は、物理実験室の内部である。学生たちが小グループに分かれて実験をしている。

3-8. 化学教室の中を歩いてみよう



物理学教室の北側に対峙して、化学教室がある。大きさもほとんど同じで、物理と化学が張り合っているような感じである。

化学教室の外観

左上の写真は、西北の方向からみた化学教室である。こちらもレンガ造りの平屋の建物である。手前の化学講堂は、2階建てのように見えるが、天井が高い造りであり、平屋である。

化学室横の汽罐室の煙突

平面図からわかるように、化学教室の中庭側には、「汽罐室（ボイラー）」と「電気機械室」が建っていた。

左上の写真には、真ん中に高い煙突が写っている。これが汽罐室の煙突である。以下、これを「化学室横の煙突」と呼ぶ。

写真に写る煙突は、当時のキャンパスの建物や位置を同定するために役に立つランドマークである。

煙突のある汽罐室はキャンパス内に4つあった。下の表のように、それぞれ「化学室横の煙突」、「分館横の煙突」などと示すことにする。

表 向丘キャンパスの汽罐室の煙突

	汽罐室の名称（仮）	煙突の名称（仮）
1	化学室横の汽罐室	化学室横の煙突
2	分館横の汽罐室	分館横の煙突
3	嚶鳴堂横の汽罐室	嚶鳴堂横の煙突
4	東寮横の汽罐室	東寮横の煙突

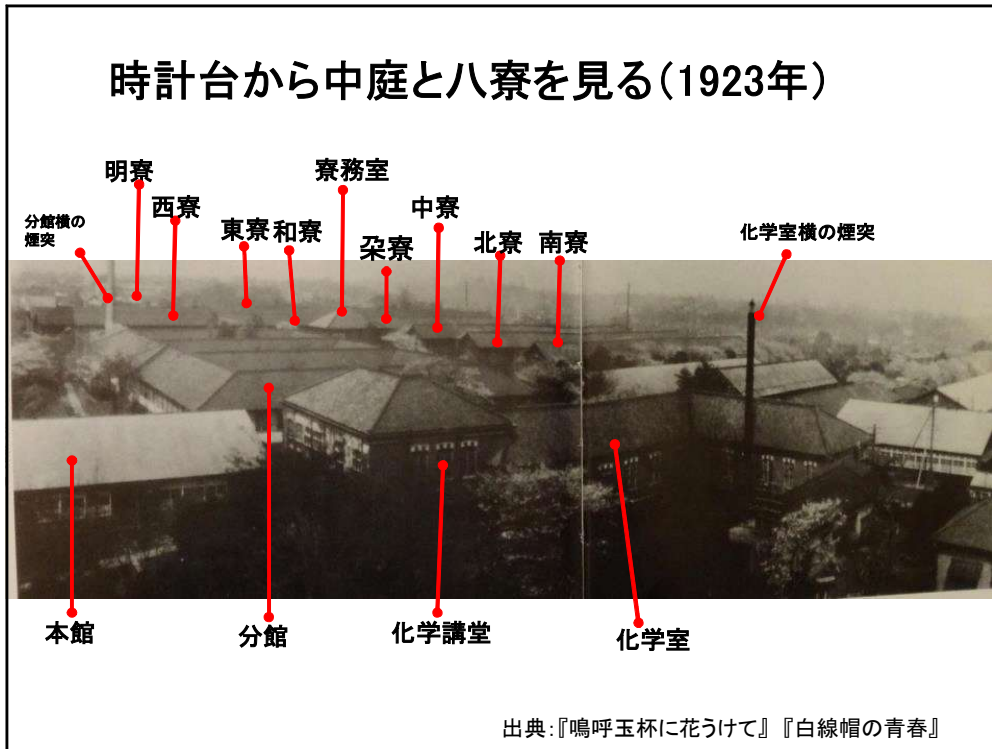
化学講堂

化学教室の最も北側には化学講堂と呼ばれた。化学講堂は2階建て高さがあるが、中は階段教室になっていて、天井が高く造られているので、平屋である。

化学実験室

左下の写真は、化学実験室の内部である。実験機と薬品棚が並び、学生たちが小グループに分かれて実験をしている。

3-9. 時計台から中庭と八寮を見る



上の写真は、1923（大正 12）年に、時計台から八寮を見た写真である。この年に関東大震災がおり、時計台が損壊したため取り壊されたが、その直前に撮ったものであろう。この写真は当時のキャンパスの配置をよくあらわしており、情報価が高い。

手前にあるのが本館と化学室である。化学講堂は2階建て高さがあるが、中は階段教室になっていて、天井が高く造られているので、平屋である。

化学室の前に移っている煙突は、前述の「化学室横の煙突」である。

本館と化学教室の間の中庭には、何本かの木がまばらに植えられている。

写真では、化学講堂の奥に分館が見える。分館は、上から見ると漢字の「目」の形をしている。

分館の左上に写っている煙突は、「分館横の煙突」である。

（この写真には、汽罐室の煙突が2本写っている。写真に写る煙突は、当時のキャンパスの建物や位置を同定するために役に立つので、それぞれ「化学室横の煙突」と「分館横の煙突」と分けて示している）

この「分館横の煙突」に重なって見える2つの屋根が西寮と明寮である。

一方、化学室の奥の方に連なる屋根が、南・中・北・朶・和・東の6寮である。

朶寮と和寮の間にある三角錐の尖った屋根は、寮務室である。寮務室は2階建てであるが、寮より少し高く作ってある。

3-10. 動植物学教室の中を歩いてみよう

動植物学教室の中を歩いてみよう

出典『向陵誌』

本館の南側に、動植物学教室がある。博物学教室と呼ばれることもあった。
 右上の写真は、動植物学教室の外観である。木造の平屋である。物理・化学に比べると小さい。建物の手前には、四角い花壇のようなものがある。
 建物の中から、本館時計台が小さく見える。また、煙突が2本立っているが、その位置からみて、左側は「分館横の煙突」で、右側は「化学室横の煙突」であろう。
 右下の写真は、動植物実験室の内部である。大きく取られた窓の前で、学生たちが各自作業をしている。大正初期の写真だが、和服を着ている学生が多い。

3-11. 摂生室（保健室）

出典『向陵誌』

摂生室(保健室)

摂生室と医師

古い摂生室

出典『向陵誌』

摂生室（保健室）は以前は分館の東側にあった。1894年の地図を見るとわかる。右下の写真は、旧摂生

室である。少し高台の上に立っている木造平屋である。

新しい摂生室は、理学教室のすぐ南側にある平屋建てである。

平面図をみるとわかるように、生徒控え所（待合室）、診察室、物置、2つの病室の5部屋からなっていた。その他、別棟に、薬局・医員控室、小使・看護婦控え室があったという。

摂生室の職員

医師は、帝大病院の各内科より4人が来ていた。高校の保健室としては恵まれた医員配置であるが、これは本郷キャンパスの帝大病院がすぐ隣りにあったからである。急病になっても、帝大病院に入院させてもらうなど、便宜をはかってもらっていた。摂生室の診察時間は午後3時～5時までの2時間だけである。夜間の発病には、外部の医師と契約していて、緊急の処置が講じられた。

ほかに薬剤師1名、看護師1名、小使1名が常駐していた。

左下の写真には、建物の前に職員が立っている。2名は白衣を着ていて、医師か薬剤師であろう。左側は白くて長い看護服を着た看護師のようである。右側は小使だろう。

右下の写真には、白い看護服を着た女性が2名写っている。男子校だった一高では、白衣の天使は学生の憧れの的だっただろう。

鬼気迫るボロさ

親元を離れて寮生活を送る学生たちにとって、病気はとても心細いことであっただろう。

『向陵誌』による描写は信じられないものである。外観は古色蒼然として、廊下は歩くと異様な音がしたり、昼間でも採光が悪く、薬臭が漂い、「鬼気迫るがごとき感」があるという。備品も骨董品のようで、ベッドは、病人だから何とかガマンするが、健康人にはとうてい寝ていられないほどのボロだった。

病気の重い学生は、自宅療養したり帝大病院に入院したが、軽い者は、荒涼たる病室に入れられるよりは、むしろ乱雑な寮の寝室で寝ているのを好んだという。そのために摂生室のベッドはますます誰も使わなくなり、新調されなかったのだという。

一高生のかかった病気

『向陵誌』には、当時の摂生室の病気のデータがある。肺炎や肺結核などの呼吸器系の病気が多いことがわかる。正岡子規は在学中に肺結核と診断された。当時は、結核にかかると、死を待つだけであり、すべての野心も理想も断念しなければならなかった。子規は34歳の若さでなくなっている。

また、この表から、神経衰弱も比較的多いことがわかる。

表 病気通学者の病名 1935（昭和10）年

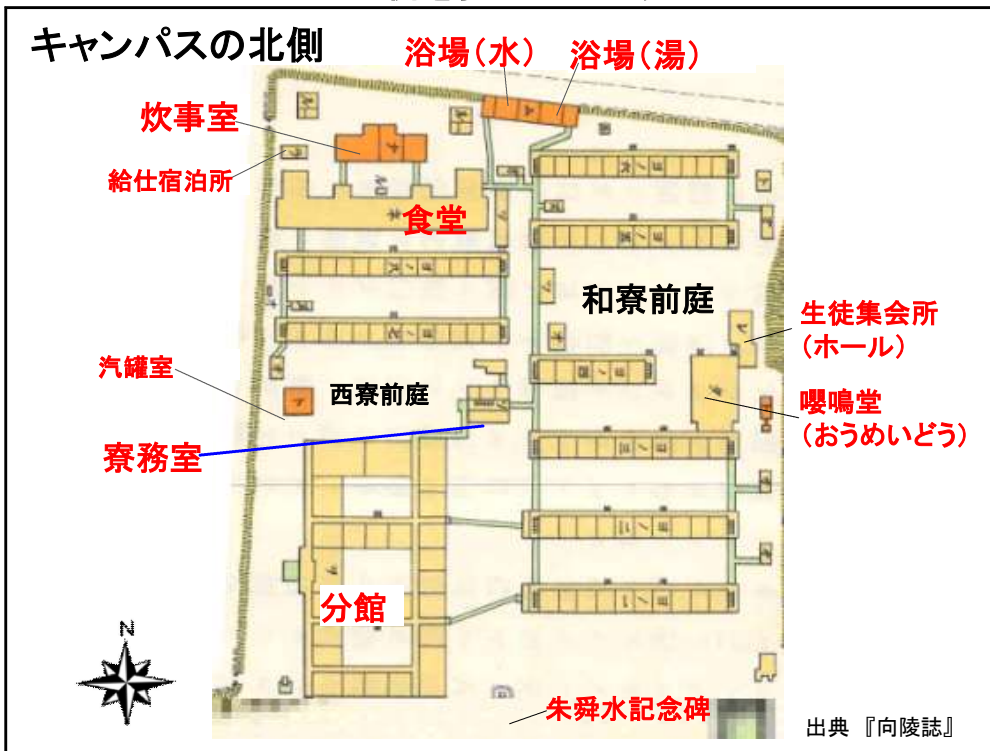
病名	人数
肺炎	25
肺結核	2
肋膜炎	2
気管支カタル	1
胃カタル	5
腸カタル	3
腎臓	1
神経衰弱	11

医科を持った一高

予備門時代の一高には、医学部が設けられた。今の千葉大学医学部の前身である。今では、医学部と教養学部といえば、片や実学、片や虚学の代表であり、大学内では両極端であるが、当時は、ひとつ屋根の下にあったのは面白い。

4. 一高へのバーチャルツアー キャンパスの北側を歩いてみよう

4-1. キャンパスの北側を歩いてみよう



キャンパスの北半分は、分館と寮のスペースである。

南西部に分館（教室）がある。分館の南東のほうには、朱舜水記念碑が立っている。

また、分館の北西のほうには汽罐室（ボイラー室）があり、煙突が立っていた。これを「分館横の煙突」と呼ぶ。

分館のすぐ右上に寮務室がある。また、東のほうに嚶鳴堂（おうめいどう）と生徒集会所がある。

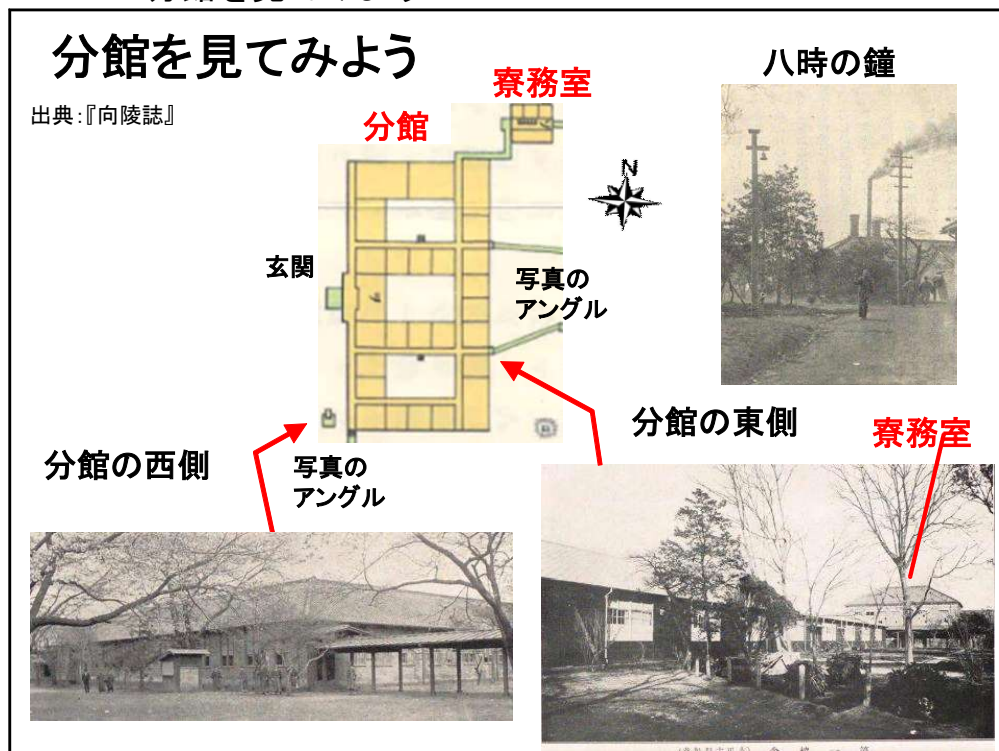
その周りに8つの寮が並んでいる。北側には、食堂・浴室・炊事室・給仕宿泊所などの施設がある。

寮と寮の間には小さな庭がある。分館の北側には「西寮前庭」という広場がある。

また、和寮と東寮の間は「和寮前庭」という広場になっている。

以下、ひとつひとつ歩いてみよう。寮については、6で詳しく述べる。

4-2. 分館を見てみよう



分館は、1～2年生の教室がある建物である。左下と右下の写真は、その外観である。一高キャンパスでは最も広い建物であるが、瓦屋根の木造平屋であり、地味なのであまり目立たない。

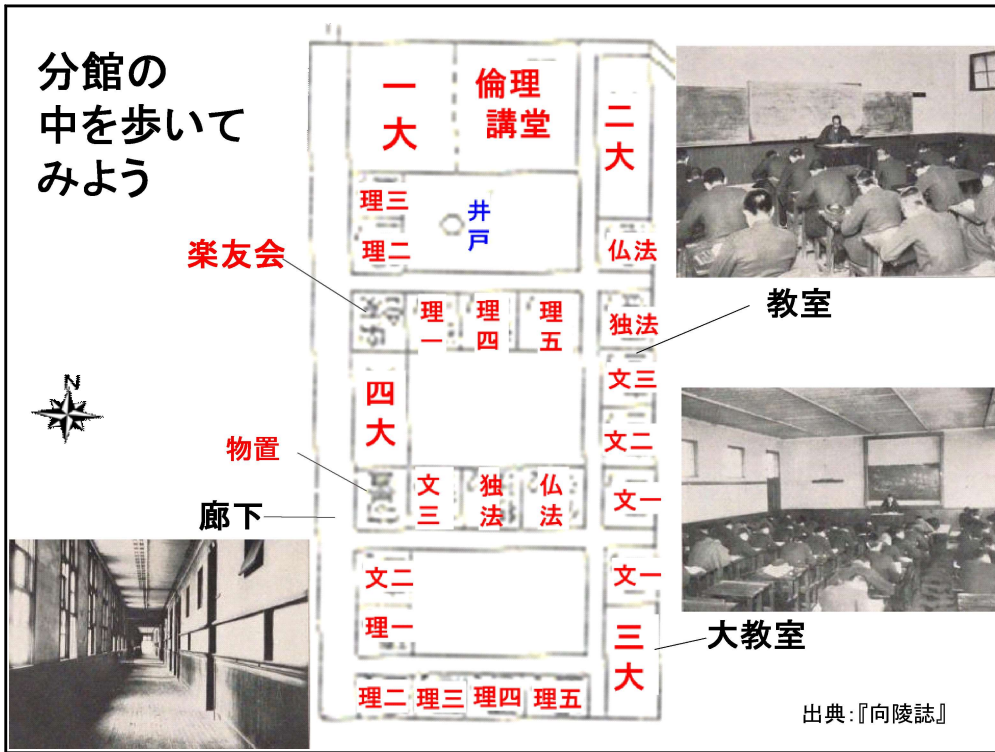
分館の建物は、上から見ると、漢字の「目」の形をしている。つまり3つの中庭を持つ構造である。北側の中庭には、井戸がある。

八時の鐘

右上の写真は、八時の鐘（朝八時の始業時間を告げる鐘）で、写真のように職員が鐘を鳴らして歩いている。左側には、柱の上に設置された鐘が写っている。始業や終業を告げる鐘で、あちこちの旧制高校の寮で使われた。

鐘の柱の設置場所は不明であるが、後ろには高い煙突と、低い煙突が2本写っている。高い煙突は化学室横の汽罐室のもの、低い煙突は物理教室と化学教室のものと一致するので、おそらく分館の東側から、南西方向を見て撮った写真と考えられる。

4-3. 分館の中を歩いてみよう



分館には教室と大教室が並んでいる。ほかに、倫理講堂や楽友会の部屋がある。

教室は、1クラス1教室である。文系は、文一から文三の3クラス、理系は、理一から理五までの5クラスある。さらに、「独法」と「仏法」の2クラスがある。計10クラスである。それぞれ2学年なので、10クラス×2学年で合計20室の教室がある。3年生になると、本館の教室に移動した。

右上の写真が教室である。かなり狭く、学生がギュウギュウ詰め込まれている。

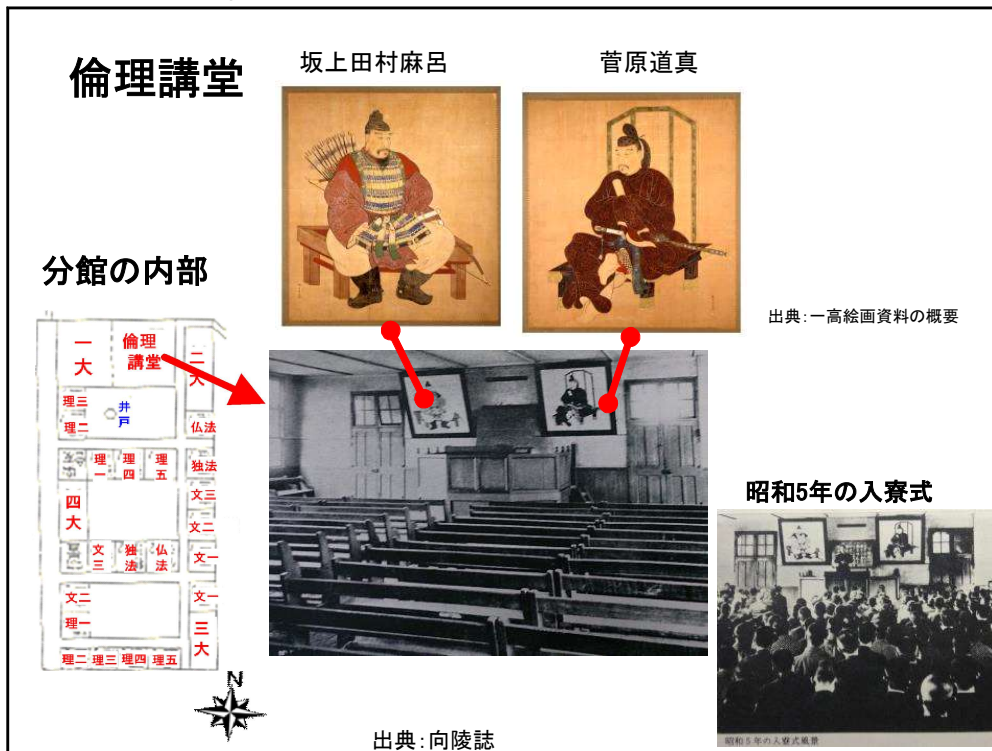
また、「一大」から「四大」とあるのは大教室である。学年合同やクラス合同などの授業に使われたのだろう。右下の写真が大教室である。教室にくらべると広いが、それでも学生がギュウギュウである。

また、「楽友会」という部屋があるが、これは音楽室だったようだ。壁がピンクだったという。

右下の写真は廊下である。前述の本館の廊下に比べると、床は板張りで、天井も低い印象がある。

分館は寮の近くにあるので、学生たちは、授業の合間に、教室と各自の寮室を往復したという。

4-4. 倫理講堂



分館の北側に、「倫理講堂」という教室がある。これは、倫理の授業のための教室である。中下の写真に示されるように、木の長椅子が置かれており、一高の全学生が座れるスペースがあった。倫理講堂では、学生のいろいろな催しも行われた。右下の写真は、入寮式のようなものである。

倫理講堂の歴史

一高では、古庄嘉門校長の時、1888（明治 21）年に、週 1 時間ずつ、倫理の授業をおこなうようになった。その後、他の高校にも設置された。明治維新直後は、欧化政策のもとに教育がおこなわれていたが、明治も 20 年をすぎると国粋主義が広まり、文部省もそうした政策に変換した。倫理科目の設置もそのひとつである。また、当時の旧制高校には、日本史の授業がなく、欧米の歴史のみだったので、日本史の科目も設置された。前述の 1889（明治 22）年の森有礼文部大臣の暗殺事件は、そうした転換を象徴する事件であった。

一高では、木下広次が校長になると、西欧化にともなって低下した倫理を回復すべく、「武士道」精神に基づく倫理教育を重視した。「自治寮」を作ったのもその延長である。週 1 回は倫理の授業があり、その教室を倫理講堂と呼んだ。

坂上田村麻呂と菅原道真

上の写真を見るとわかるように、倫理講堂の前方には、坂上田村麻呂と菅原道真の画がかかっている。坂上田村麻呂は「武」を象徴し、菅原道真は「文」を象徴している。

一高の「歴史参考室」と岡倉天心

木下広次校長は、倫理教育を重視した。また、当時は欧米の歴史の授業しかなかったため、日本史の科目を設置した。こうした倫理教育や日本史の授業の教材として、「歴史参考室」を作り、日本の歴史の絵を集めた。

その時、美術界では、岡倉天心やフェノロサが、西洋美術を排斥して、東洋や日本の伝統美術を称揚する運動をおこし、東京美術学校（後の東京芸術大学）を作ったばかりであった。木下校長は、岡倉天心の了解を得て、こうした動きにかかわっていた新進の画家に絵を注文した。つまり、橋本雅邦、巨勢小石、川辺御楯、川端玉章らである（彼らの指導のもとで、東京美術学校で下村観山、横山大観などが育った）。こうした歴史画は 1892～93 年（明治 25～26 年）に一高に購入された。これらの絵は、現在の東京大学の駒場博物館のホームページで公開されている。

そうした歴史画の一部が、倫理講堂に飾られた菅原道真と坂上田村麻呂の絵である。

内村鑑三不敬事件と徳富蘆花「謀叛論」事件

この倫理講堂は、2つの有名な事件の舞台として有名である。

内村鑑三不敬事件は、1981（明治 24）年、一高の嘱託教員だった内村鑑三が、教育勅語の奉読の際に、拝礼をしなかったことを批判されて、職を追われた事件である。

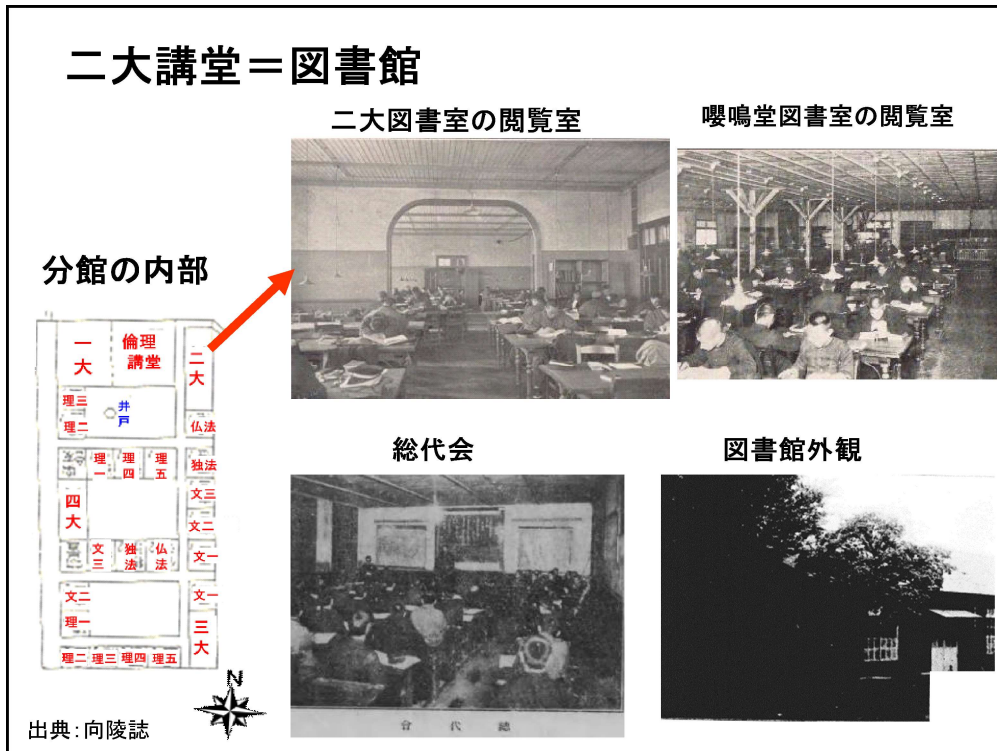
また、1911（明治 44）年には、徳富蘆花が、倫理講堂で「謀叛論」と題する講演を行った。この中で、大逆事件の幸徳秋水らの死刑宣告を批判した。このことが批判されて、新渡戸稲造校長が政府から譴責処分

を受けた。これが徳富蘆花「謀叛論」事件である。

この倫理講堂は、駒場キャンパスの講堂にも引き継がれた。戦後、新制大学になると、倫理とは無関係となり、この教室は「900番教室」と呼ばれた。今でも授業がおこなわれている。

駒場の900番教室もいろいろな話題の舞台となった。最近の映画『三島由紀夫 vs 東大全共闘 50年目の真実』は、1969年にこの900番教室でおこなわれた討論会の記録である。1992年にはオウム真理教の教祖 麻原彰晃が900番教室で駒場祭の講演をした。

4-5. 二大教室=図書館



分館の北側、「倫理講堂」のとなりの「二大教室」は、図書館として使われた。

二大教室は、もともと総代の会議場として使われていた。左下の写真は、総代会の様子である。

後述のように、図書室は、採光も悪くて、狭かったので、学生は学校当局と折衝し続け、1931（昭和6）年に、図書室は、嚶鳴堂から分館の二大教室に移動した。

二大図書館の時代

左上の写真は、二大図書館の閲覧室である。右上の写真の嚶鳴堂図書室（後述）に比べると、明るくて広い。天井から電灯が下までぶら下がっているのは同じである。

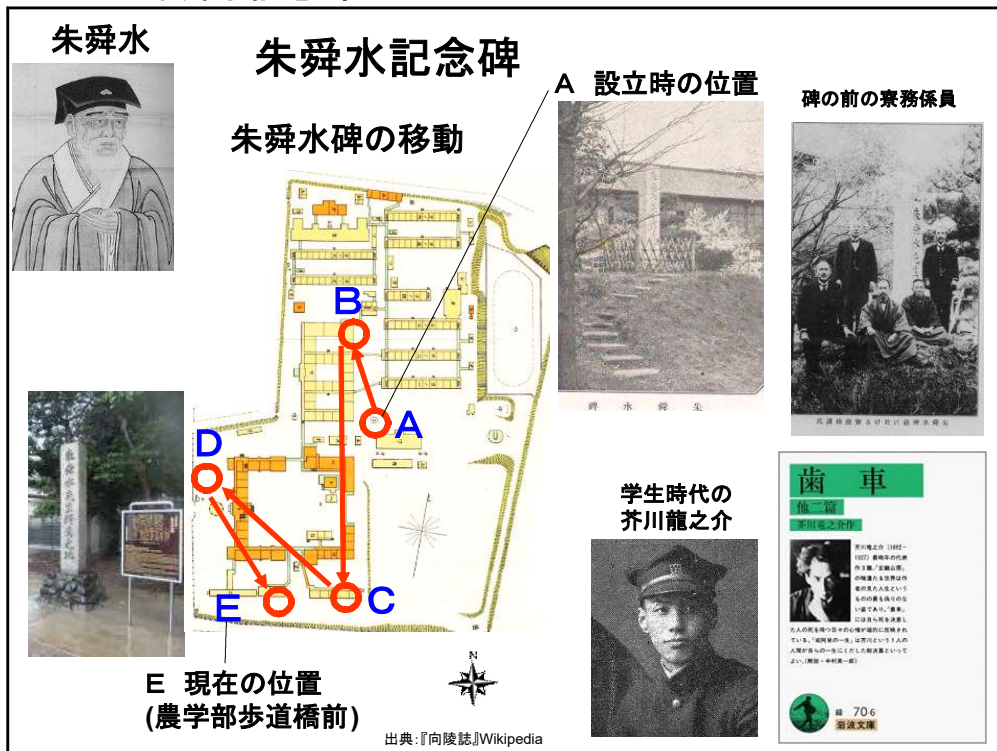
机は、こちら側に8個、向こう側の区画に10個くらい見える。ひとつの机は8人掛けのようなので、ざっとみても、机18×8人掛け=144人収容できる。

後述のように、嚶鳴堂図書室が4人掛けの机が18個で、全体で72人くらいしか利用できなかったのに比べて、二倍以上の収容力がある。

とはいえ、二大図書館も十分な環境ではなかった。試験期間には図書館の利用が増えたが、全学生の数に比べると収容人数は少ない。また、総代会がある日は、図書館は使えなくなった。

右下の写真は、分館の二大教室を外から見たところである。

4-6. 朱舜水記念碑



分館の東のほうには、朱舜水記念碑が立っている。

朱舜水碑の建立

朱舜水は、前述のように（1-4参照）、中国の明からやってきた儒学者であり、徳川光圀が水戸藩の藩邸に呼んだ。そこで彰考館の学者と交流し、『大日本史』の編纂や水戸学に大きな影響を与えた。舜水は1682年に水戸藩邸内で亡くなった。

その230年後の1912（明治45）年に、舜水の日本渡来250年にあたって、「朱舜水先生二百五十年記念会」が開かれた。それを記念して、この石碑が建てられた。「朱舜水先生終焉之地碑」と彫られている。碑文を揮毫したのは当時の一高校長の新渡戸稲造であった。当時はまだ儒学の影響も強かったのだろう。

右中の写真を見ると、記念碑は、小さな山を作り、その上に建てられている。そこへ登る階段が写っている。右中の写真は、碑の前で撮られた寮務係の人の記念写真である。

芥川龍之介と朱舜水

当時一高生だった芥川龍之介は、1912年の朱舜水碑の建碑式に参加した。晩年に、竜之介は『歯車』の中で、このことについて触れている。

僕はふと十四五年以来、いつも親和力を感じる度に僕が目も彼の目のように結膜炎を起すのを思い出した。が、何とも言わなかった。彼は僕の肩を叩き、僕等の友だちのことを話し出した。それから話をつづけたまま、或カフェへ僕をつれて行った。

「久しぶりだなあ。朱舜水の建碑式以来だろう」

彼は葉巻に火をつけた後、大理石のテーブル越しにこう僕に話しかけた。

「そうだ。あのシュシュン……」

僕はなぜか朱舜水と云う言葉を正確に発音出来なかった。それは日本語だっただけにちょっと僕を不安にした。しかし彼は無頓着にいろいろのことを話して行った。

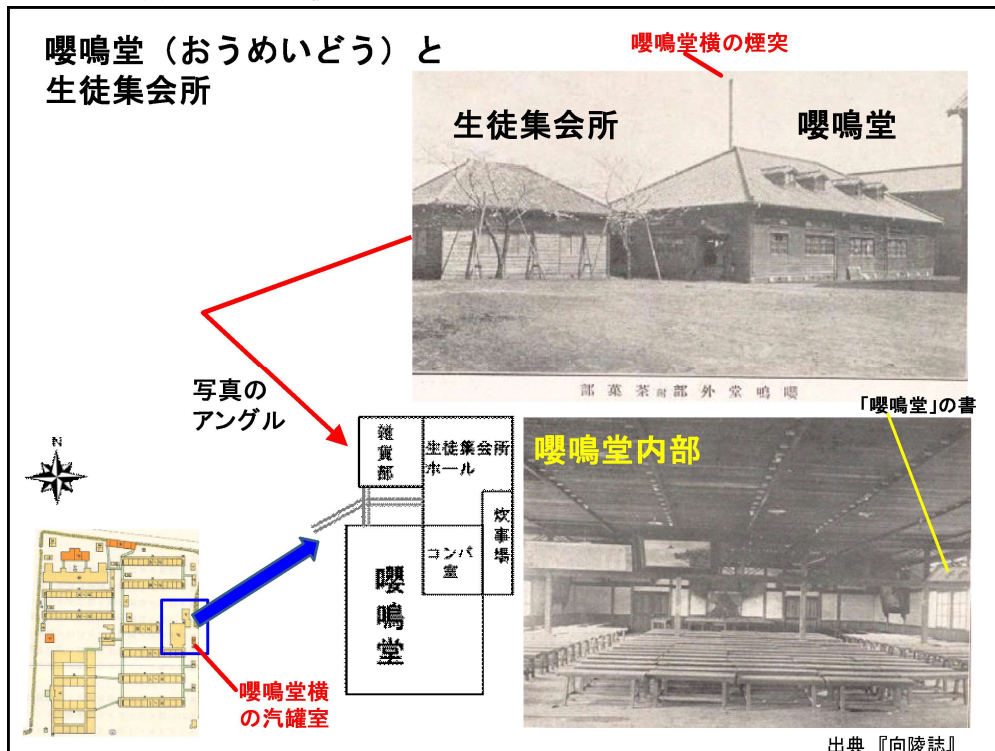
芥川竜之介『歯車』青空文庫

『歯車』では、芥川を自殺に追い詰めたさまざまな不気味な幻視や妄想などが描かれているが、ここでは朱舜水という発音ができなかったことへの不安が描かれている。

朱舜水碑の移動

その後、この地は東京大学農学部のキャンパスとなり、記念碑は4回引越をして、現在の位置に建っている。現在の記念碑については後述する。

4-7. 嚶鳴堂と生徒集会所



嚶鳴堂（おうめいどう）は、キャンパスの北東部に、寮の建物にはさまれて建っている。

嚶鳴堂と生徒集会所の外観

右上の写真は、右に「嚶鳴堂（おうめいどう）」、左に生徒集会所が写っている。いずれも木造平屋の建物である。

嚶鳴堂の屋根の上には、大きな明かり取りの窓がついていて、独特の形をしている。

生徒集会所は、ボロ小屋のような外観をしている。

嚶鳴堂横の汽罐室の煙突

また、左の地図にあるように、嚶鳴堂の東側には汽罐室があり、煙突が立っている。これを、以下では、「嚶鳴堂横の煙突」と呼ぶことにする。

右上の写真には、この「嚶鳴堂横の煙突」が写っている。

嚶鳴堂と生徒集会所の内部

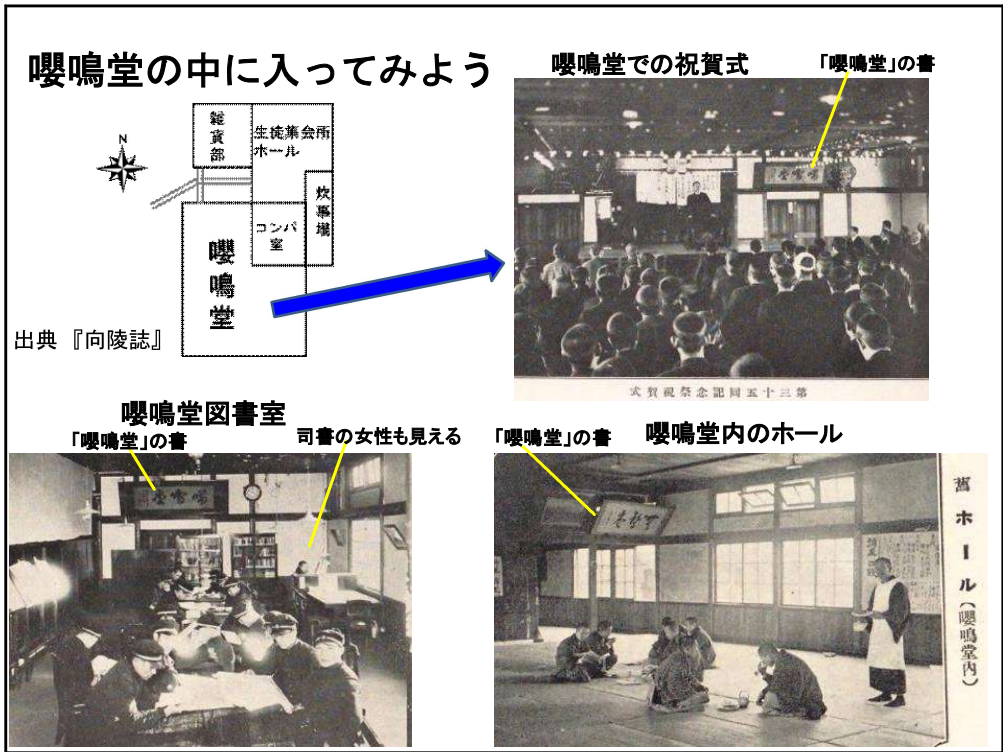
嚶鳴堂と生徒集会所の平面図が『向陵誌』に載っていた。2つの建物が隣り合い、一部が重なるように作られている。

右下の写真は嚶鳴堂の内部である。内部は広くて、長椅子がたくさん並んでいる。右のほうに半分映っているのは、「嚶鳴堂」と書かれた額である。この部屋は、畳敷きでふだんは食堂（コンパ室）として使われているが、学生のいろいろな集会もここで開かれた。そうした集会時に長椅子が並べられた。

この建物は、もともと、寮の「会堂」と呼ばれていたが、1903年に狩野校長が「嚶鳴堂」と名付けた。「嚶鳴」とは、鳥が睦まじく鳴き交わすことで、友人が互いに声を出し合って励ましあうようすをさす。

嚶鳴堂は、駒場キャンパスにも建てられたが、戦災で焼失した。

4-8. 嚶鳴堂の中に入ってみよう



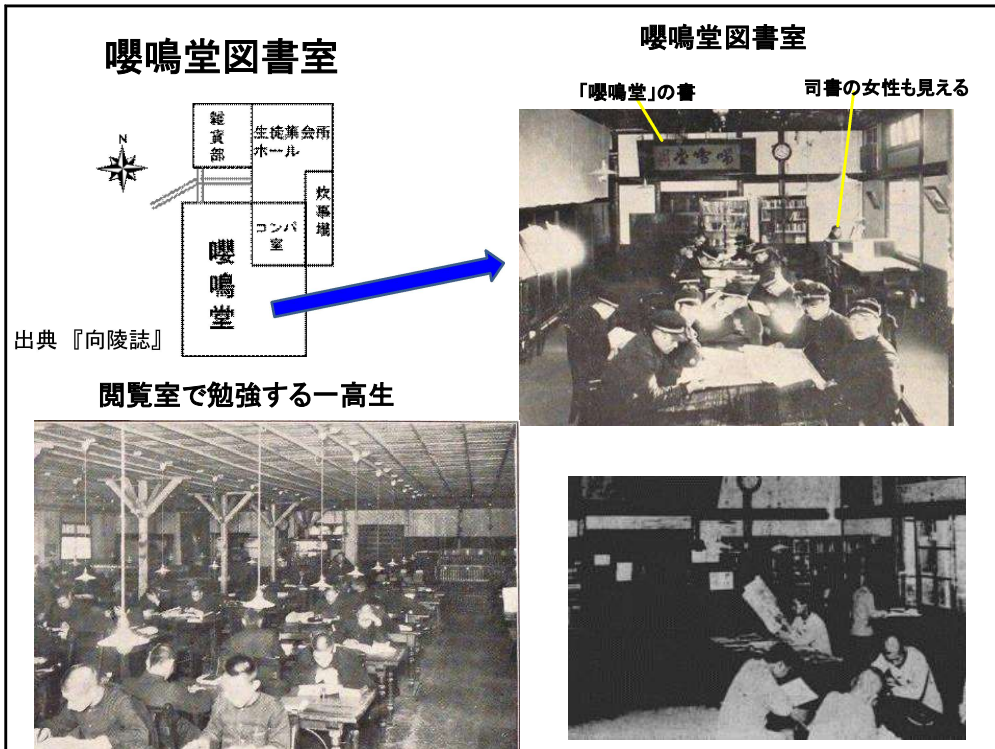
右上の写真は、嚶鳴堂で開かれた第35回記念祭祝賀式のものである。部屋の正面右側には、「嚶鳴堂」と書かれた額が飾ってある。前に壇があり、教師が立っている。部屋の前方には、教師たちが座っている。こちら側には、学生たちがびっしりと座っている。

コンパ室（旧ホール）

平面図によると、嚶鳴堂の北西の角は「コンパ室」があった。

右下の写真が「コンパ室」である。部屋の正面に、「嚶鳴堂」と書かれた額が飾ってある。畳が敷かれていて、学生たちが三々五々、座っている。床に盆を敷いて、その上のものを食べたり、お茶を飲んだりしている。コンパというのは学生が集団で飲食をすることである。右には、白い前掛けをつけて、立って食べ物とお茶を運んでいる給仕のような人も見える。

4-9. 嚶鳴堂図書室



嚶鳴堂には、1925～1931年まで、図書室があった。

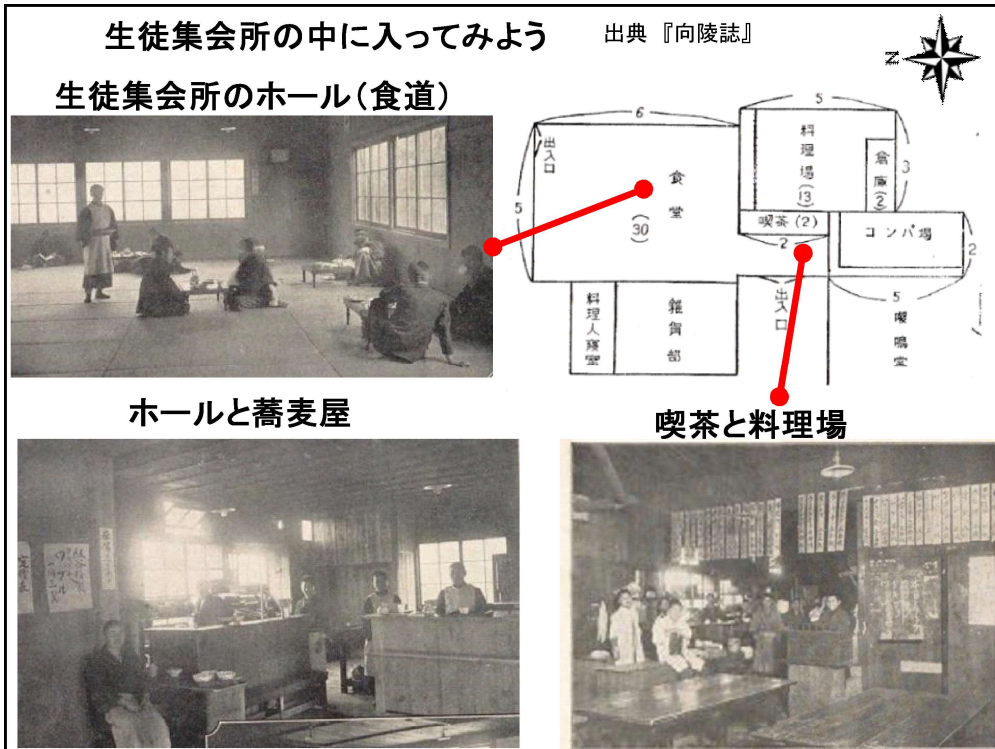
『向陵誌』によると、向丘キャンパスには図書室がなくて、学生からの要望が強くなったので、1925（大正14）年に、嚶鳴堂（おうめいどう）の中に図書室が作られた。

右上の写真は、図書室である。左の奥に「嚶鳴堂」と書かれた額が飾ってあるので、嚶鳴堂とわかる。中央に机があり、制帽をかぶった学生たちが本を読んでいる。右の後ろのほうには、司書らしい女性も写っている。もともとは自由閲覧制だったが、本の管理のためカード制が取り入れられた。それで司書が雇われたのであろう。

左上の写真は閲覧室である。天井が低く、天井を支える三角形のつかい棒が立っている。これらは嚶鳴堂の特徴である。天井から無数の電灯が下がっていて、その明かりの下で、たくさんの坊主頭の学生が勉強している。奥の方に、教師らしき人が座っているのが見える。写っている机の数は、一列6個×3列で18個。1個の机が4人がけなので、72人くらいしか利用できない。試験勉強のために図書館を利用する学生も多かったため、これではどうも足りない。

このように、採光も悪く、狭くて利用できるのは少数であることがわかる。このため、もっと広い部屋を学生は学校当局と折衝し続けた。その結果、1931年に、図書館は分館の二大教室に移動した（4-5参照）。

4-10. 生徒集会所の中に入れてみよう



右上の図は、生徒集会所の内部配置図である（『向陵誌』）。左が北になっているので、向きに注意。

生徒集会所（新ホール）

左上の写真は、生徒集会所のホールである。嚶鳴堂のホールが「旧ホール」と呼ばれていたのに対し、こちらは「新ホール」と呼ばれている。畳敷きの30畳の広いスペースである。学生たちが三々五々集まって、食事をしている。白い前掛けをつけて、立って食べ物を運んでいる給仕のような人も見える。旧ホールでは、床にお盆を敷いて食べていたが、こちらの新ホールでは、学生たちは、小さなお膳を使って食べている。

左下の写真は、喫茶と料理場であろう。前には大きなテーブルが並んでいる。勘定台には、中年女性が立っている。壁には「本日のランチ」という献立が見える。天井から軽食のメニューの紙がたくさん下がっている。「ランチ」という字が見える。学生たちに混じって、着物を着た女性のウェイトレスも写っている。

その奥は、炊事場のように見える。

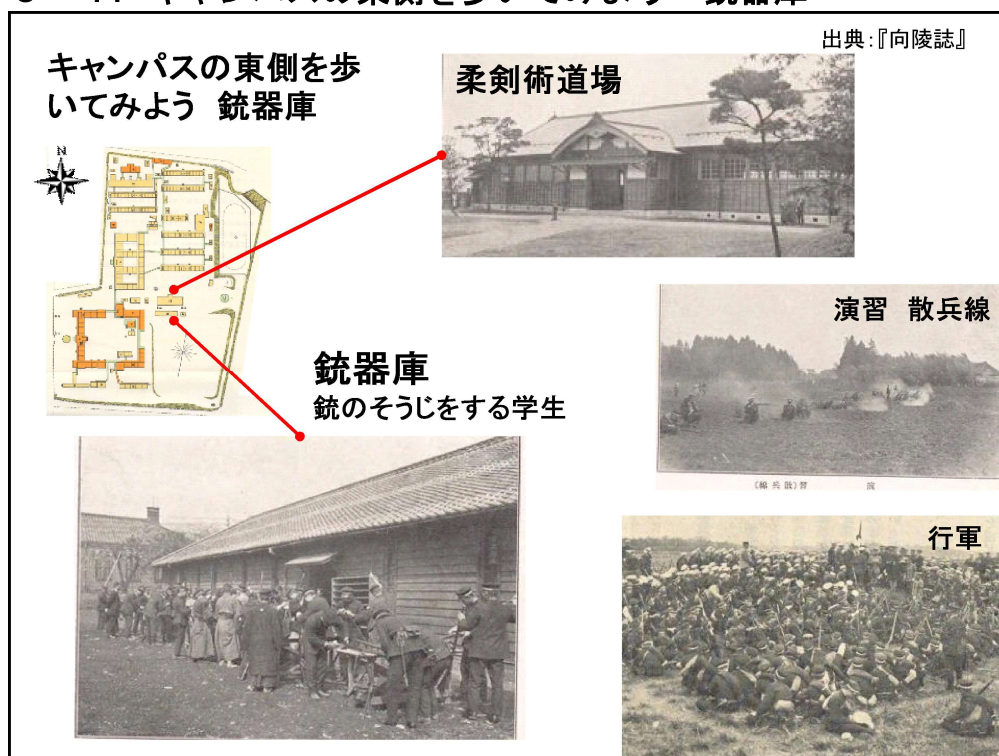
左下の写真には、「ホールと蕎麦屋」というタイトルがついている。右下の写真と同じアングルで撮ったものと思われるが、少し時代が違うようだ。壁には「ワッフル一皿三銭」と「定価表」の貼り紙がある。白い前掛けをつけた中年女性と、同じく白い前掛けをつけた2人の男性給仕が立っている。

雑貨部

平面図には、「雑貨部」とも書かれている。購買部の売店のことであろう。外観の写真には写っていないものもあるので、雑貨部は後で増設された建物であろう。隣りに「料理人寢室」という小部屋もある。

5. 一高へのバーチャルツアー キャンパスの東側を歩いてみよう

5-1. キャンパスの東側を歩いてみよう 銃器庫



キャンパスの東側は、運動施設が並んでいる。

柔剣術道場

右上の写真は、銃剣道場である。1894年と1905年の地図では、柔道場と撃剣場が別々の建物であった。1923年の地図では、まとめてひとつの建物となった。正面玄関の飾りは立派である。

銃器庫

左下の写真は、銃器庫である。当時の旧制高校には軍事教練があり、それに使う武器が銃器庫に保管されていた。平屋の倉庫のような木造建物である。

銃器庫の前で、銃を台の上において、制帽をかぶった学生たちが銃の掃除をしている。奥のほうには教官らしき大人がいる。

右中の写真は、「演習 散兵線」というタイトルである。平原で砂ぼこりをあげながら、学生たちが横に並んで、銃を構えている。向丘キャンパスではないようだ。

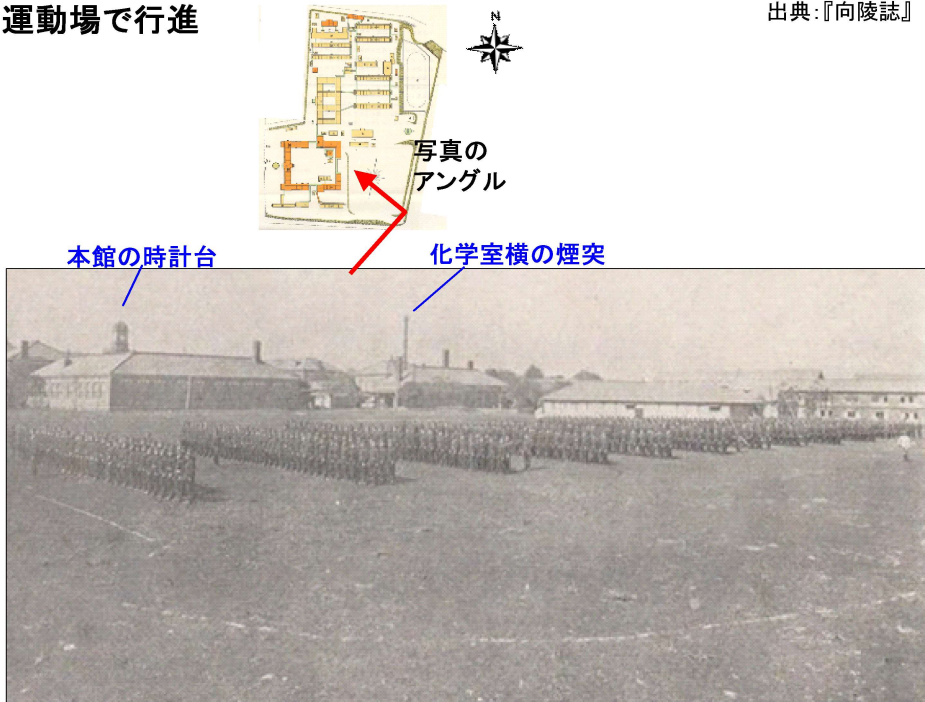
右下の写真は、「行軍」というタイトルである。おびただしい数の学生が、黒か白かの制帽をかぶり、学生服を着て、小さな風呂敷包みを背負い、銃をかついで行軍している。この時は休憩中であろう。前のほうの学生は地面にへたりこんでいる。前のほうの学生は、銃をかついでいないが、へたり込み具合は半端でない。奥の学生たちは、白い帽子をかぶっているが、姿勢はきちんとしている。奥の中央部分には、軍人らしき教官が20名ほど立って打ち合わせをしている。

これも旧制高校のひとつの側面であった。

5-2. 運動場で整列

運動場で行進

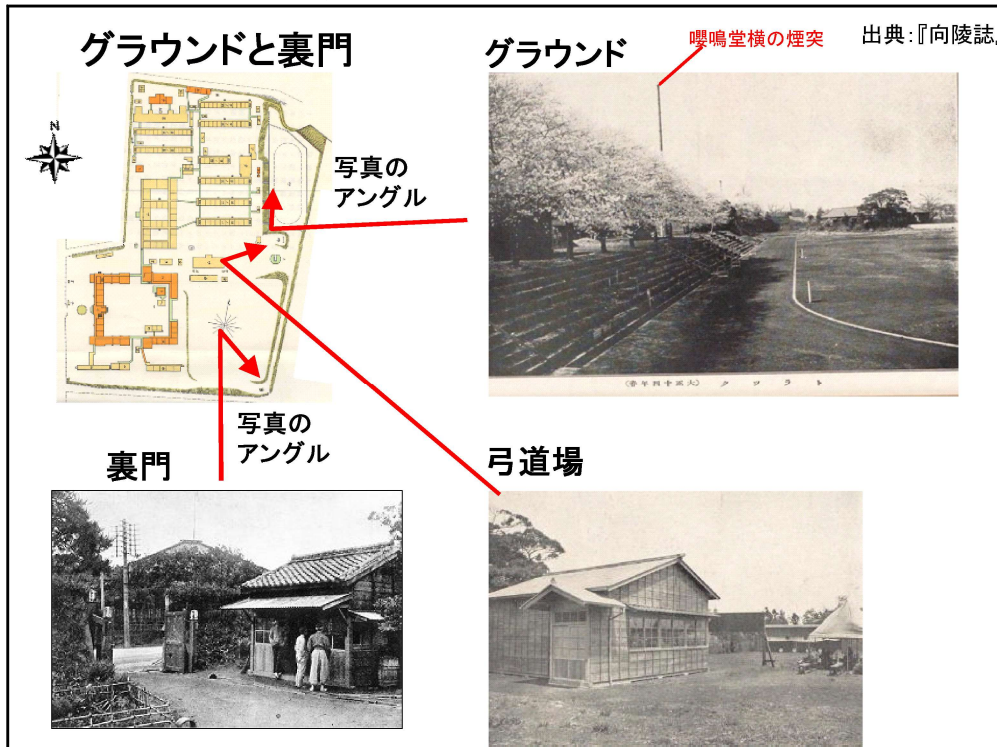
出典:『向陵誌』



この写真は、運動場に全学生が集合して、整列しているところである。日露戦争の直後に撮られたものである。学生が銃をかついでいるわけではないが、軍事訓練を思わせる写真である。

一高の運動場はこんなに広がった。ここが一高である証拠として、うしろにある建物は、これまで出てきた建物である。左にあるのは本館の時計台である。その前の建物は、物理教室と化学教室である。その右側には、銃器庫があり、その右側には寮が並んでいる。真ん中の高い煙突は、「化学室横の煙突」であろう。このように時計台や煙突などのランドマークは、場所を特定するのに役に立つ。

5-3. トラックと裏門



トラック

右上の写真は陸上競技のトラックである。南側からみたところである。楕円の白い線が見えており、左側

は土手になっていて、階段状の見物席になっている。土手の上は桜の並木である。

高い煙突が写っているが、これは場所からみて、「嚶鳴堂横の煙突」であろう。

弓道場

右下の写真は、弓道場である。左の建物が、射手が弓を引く射場であり、右奥に的がある。その間は矢道（中庭）である。右側に白いテントが張っており、長椅子が並んでいる。何かの試合の時の写真であろう。

裏門

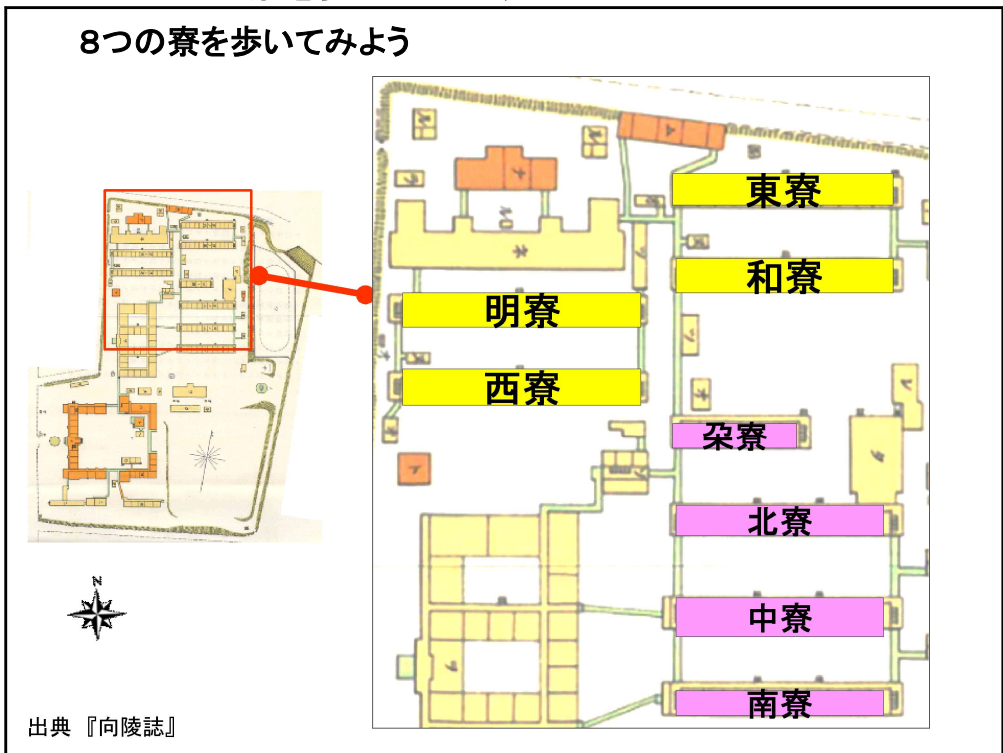
左下の写真は、裏門である。北側から撮ったもの。建物は門衛所であり、ふたりの学生が立ち寄っている。その横に、木製の裏門が見える。

前述のように、一高生は「正門主義」を貫いたので、学生はほとんど裏門は利用しなかったという。

門の外は、今の言問通りと暗闇坂である。右の暗闇坂を下っていくと、根津方面に行ける。

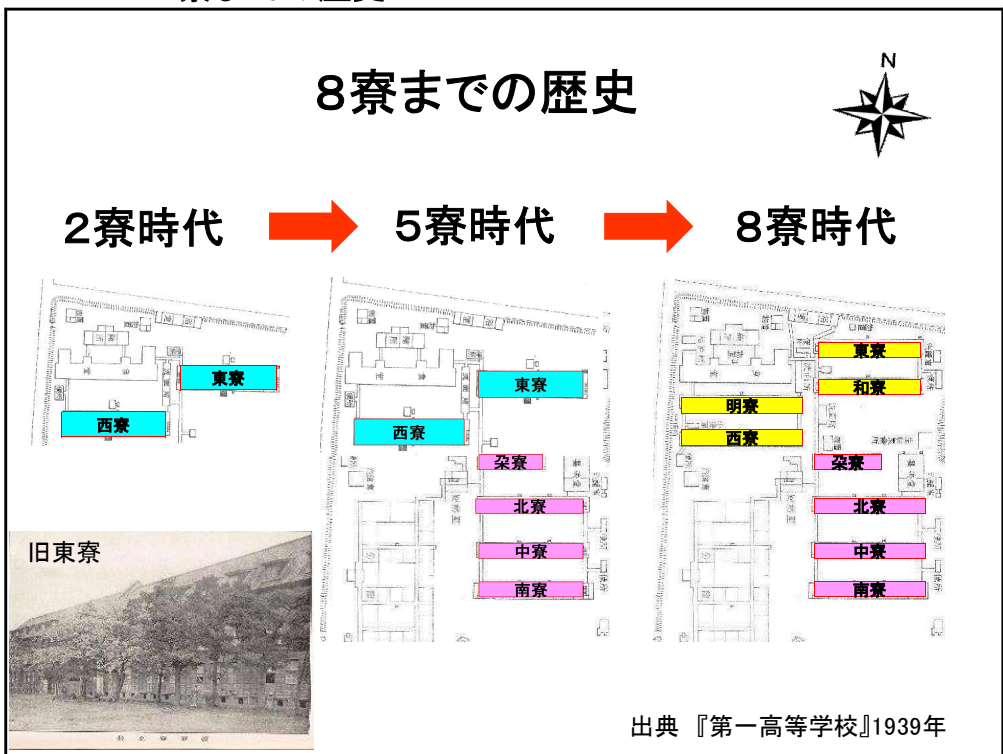
6. 一高へのバーチャルツアー 学生寮を歩いてみよう

6-1. 8つの寮を歩いてみよう



次に、キャンパス北側の寮を歩いてみよう。
8つの寮は上の図のように配置されている。西側に、明寮と西寮がある。東側に、東寮・和寮・南寮・北寮・中寮・南寮の6つが並んでいる。

6-2. 8寮までの歴史



8つの寮は、はじめから8つあったわけではない。
上の図に示すように、大きくは、2寮時代→5寮時代→8寮時代と発展した。
もっと詳しく言うと、6段階を経て完成した。寮ができる過程をまとめると、次の表のようになる。

表 一高の学生寮の変遷

	段階	寮数	寮名	期間	説明	参照
向丘 キャン パス	第1	2寮 時代	東西	1890年3月 ～9月 (0.5年)	向ヶ丘キャンパスに移った当時は、「東寮」と「西寮」のみで出発した。	1894年 の地図
	第2	4寮 時代	東西南 北	1890年9月 ～1900年 (10年)	1890年9月に、敷地外に「北寮」と「南寮」が作られた。	1894年 の地図
	第3	5寮 時代	東西南 北中	1900年～ 1905年 (5年)	1900年に、敷地外の「北寮」と「南寮」がなくなり、かわって敷地内に新しい「北寮」と「南寮」と「中寮」が作られた。1901年に寮歌『嗚呼玉杯に花うけて』で「五寮の健児」と歌われる。	1905年 の地図
	第4	6寮 時代	東西南 北中 朶	1905年～ 1919年 (14年)	1905年に、新たに「朶寮(だりょう)」が作られた。	1905年 の地図
	第5	7寮 時代	東西南 北中 朶和	1919年～ 1920年 (1年)	1919年に、「東寮」が壊されて、新しい「東寮」と「和寮」が作られた。	1923年 の地図
	第6	8寮 時代	東西南 北中 朶和明	1920年～ 1935年 (15年)	1920年に、古い「西寮」が壊されて、新しい「西寮」と「明寮」が作られた。1935年のキャンパス交換により、寮は農学部校舎として使用された。	1923年 の地図
駒場 キャン パス	第7	3寮 時代	南中北	1935年～ 1939年 (4年)	1935年に駒場キャンパスに、新しい南北中の3寮が建てられた。	後述
	第8	4寮 時代	南中北 明	1935年～ 1950年 (15年)	1939年に、新たに「明寮」が建てられた。これは外国人留学生のための寮であった。その後、1950年に4寮は東京大学教養学部へ受け継がれた。	後述

第1段階「2寮時代」1890年3月～9月

第一高等中学校が向ヶ丘キャンパスに移った当時は、「東寮」と「西寮」のみで出発した。前述の1894年の地図に出ている。この2つの寮は、3階建ての巨大な建物だった。左下の写真は、東寮である。

第2段階「4寮時代」1890年9月～1900年

その半年後の1890年9月に、敷地外に「北寮」と「南寮」が作られた。これによって、東西南北の4寮となった。木下広次校長の時代である。この4寮時代は10年続いた。

1894年の地図には、キャンパスの東側の敷地外に「北寮」と「南寮」がある。北寮と南寮は、東京校舎会社という会社が建て、年5000円で一高がリースしていたという。しかし、北寮と南寮は人気がなかった。西寮と東寮が3階建てだったのに対し、北寮と南寮は2階建てであったし、北寮と南寮は建物が粗雑で日当たりが悪く、校舎との行き来も不便だったからである。そこで、10年ほどで北寮と南寮は壊されることになる。北寮と南寮の写真は見つからなかった。

南北寮分割事件

1897年には、「南北寮分割事件」がおこる。『向陵誌 一高応援団史』4頁によると、北寮と南寮は人気がなく寮生も減ったので、1897(明治30)年に、高等師範学校が臨時教員養成所を新設するために、この南北寮の場所を使おうとした。しかし、寮生が反対運動を展開したので、何とか廃止を免れたという事件である。

第3段階「5寮時代」1900～1905年

1900年に、敷地外の「北寮」と「南寮」が一高のものでなくなり、かわって敷地内に新しい「北寮」と「南寮」と「中寮」が作られた。これによって、東西南北中の5寮となった。前述の1905年の地図に出ている。狩野亨吉校長の時代である。この5寮時代は5年しか続かなかった。

後述のように、1901年に寮歌『嗚呼玉杯に花うけて』で「五寮の健児」と歌われる。

第4段階「6寮時代」1905～1919年

1905年に、新たに「朶寮(だりょう)」が作られた。これによって、東西南北中朶の6寮となった。1905年の地図に出ている。この6寮時代は14年も続いた。

第5段階「7寮時代」1919～1920年

1919年に、古い「東寮」が壊されて、新しい「東寮」と「和寮」が作られた。これによって、東西南北

中朶和の7寮となった。前述の1923年の地図に出ている。

第6段階「8寮時代」1920～1935年

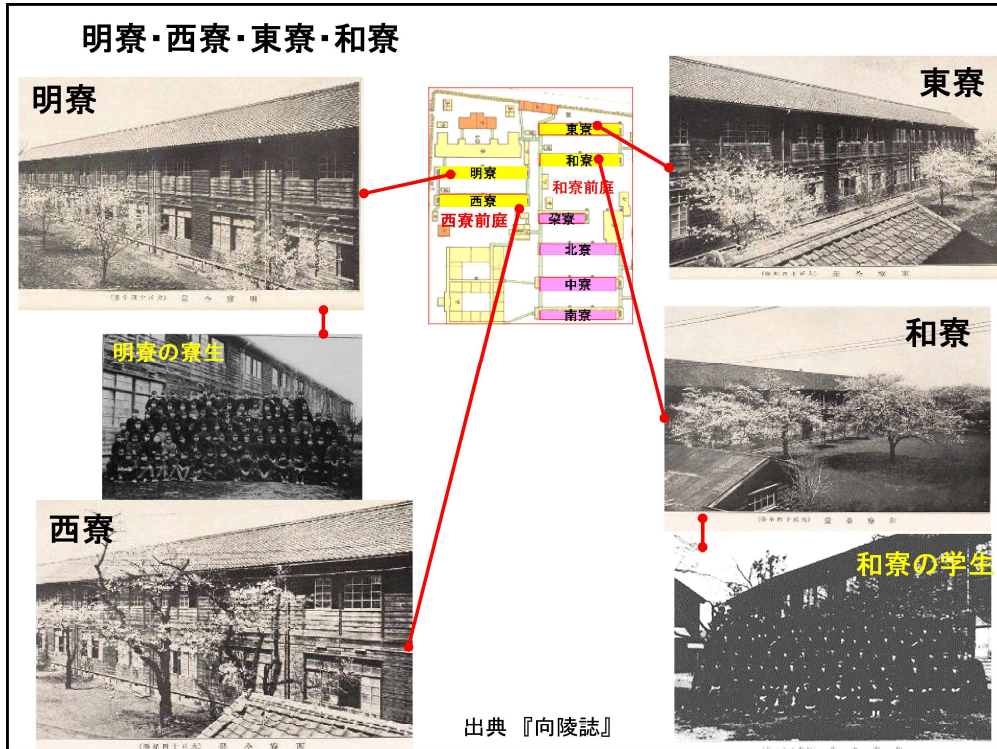
翌1920年に、古い「西寮」が壊されて、新しい「西寮」と「明寮」が作られた。これによって、東西南北中朶和明の8寮となり、八寮時代が到来した。1923年の地図に出ている。菊池寿人校長の時代である。この8寮時代は最も長く、15年も続いたのである。

このように寮が増えていったのは、学生数が増えたことと、一高が全寮制を取るようになり、通学生が減ったことによる。

第7段階「3寮時代」1935年以降

1935年のキャンパス交換により、一高は駒場キャンパスに移動した。新しい駒場キャンパスには、新しい3つの寮、すなわち新しい南寮・中寮・北寮が待っていた。ここからは、後述の駒場キャンパスの話になる。それまでの向丘キャンパスの寮は、農学部の校舎として使用された。

6-3. 明寮・西寮・東寮・和寮



それぞれの寮を見てみよう。

まず、北側にある明寮・西寮・東寮・和寮は、1919～1920年に作られた比較的新しい寮である。木造2階建てである（昔は3階建ての寮もあったが、のちにはすべて2階建てとなった）。

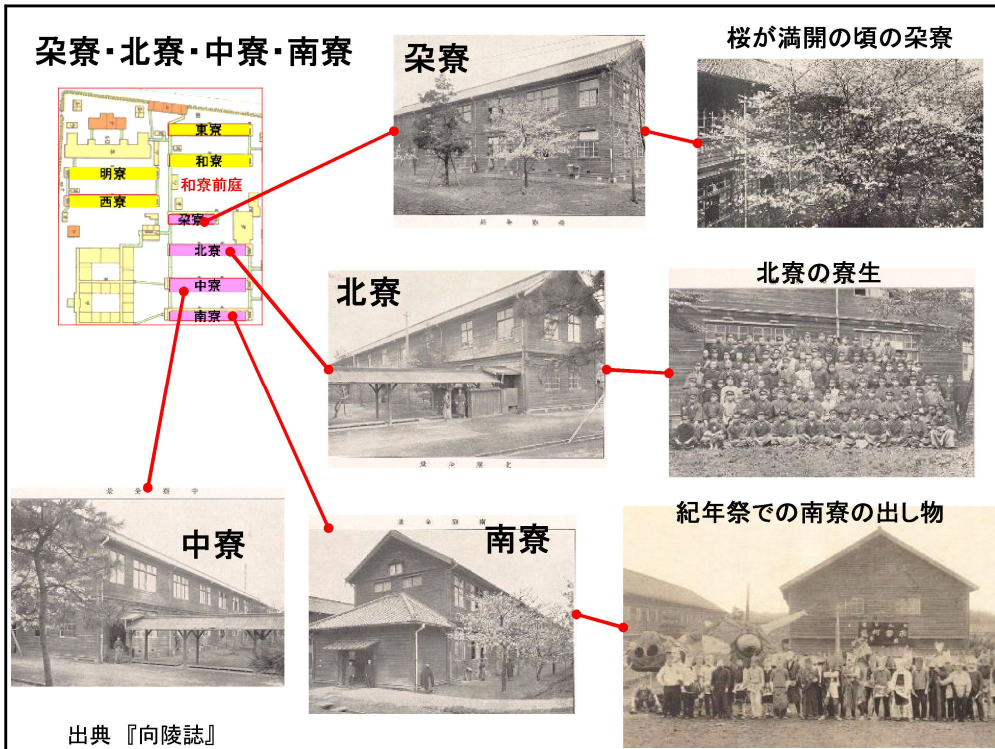
部屋数も多い。明寮と西寮は26室、東寮と和寮は24室である。

右上の写真で、東寮の下にある小さな建物は浴場である。

右中の写真で、和寮の下にある小さな建物は洗面所である。和寮の前には桜の木が茂っている。和寮と朶寮の間の庭は「和寮前庭」と呼ばれ、春になると、桜の花が満開になった。

左下の写真で、西寮の下にある小さな建物は、寮務室に付属している小屋である。西寮の前には桜の木が茂っている。西寮と分館の間の庭は「西寮前庭」と呼ばれ、

6-4. 朶寮・北寮・中寮・南寮



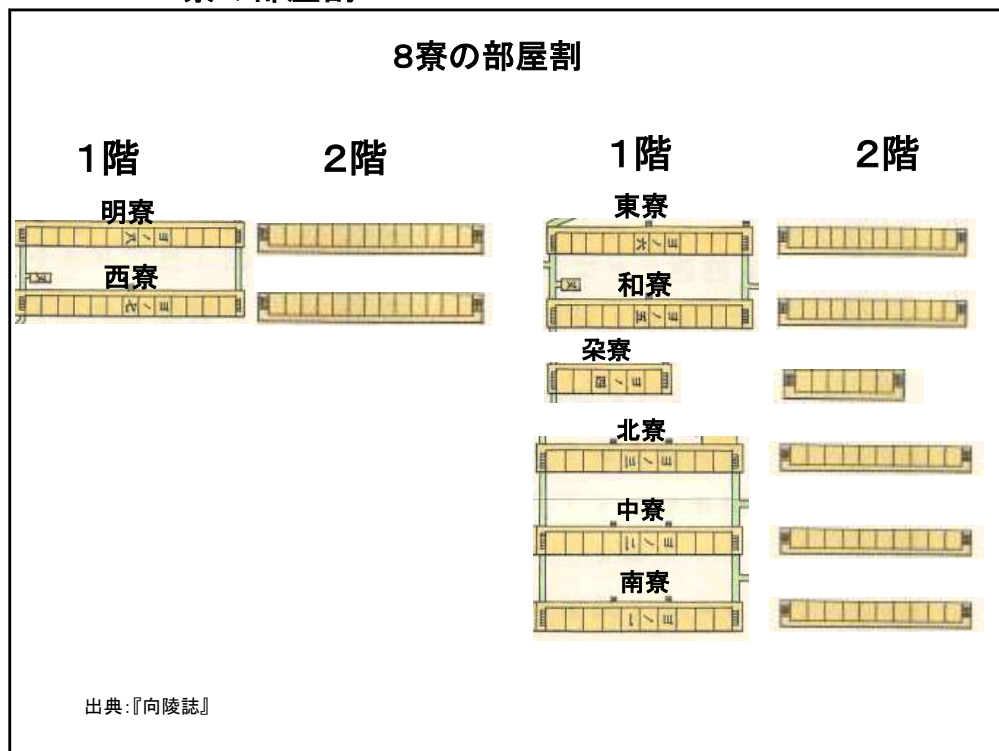
朶寮（だりょう）は1905年に建てられ、北寮・中寮・南寮は1900年に作られた比較的古い寮である。木造2階建てである。

部屋数は比較的少ない。朶寮は12室、北寮・中寮・南寮はそれぞれ20室である。その分、1室の広さは大きく作られている。

左上の写真の朶寮は南側から見たものである。右上の写真の朶寮は北側の「和寮前庭」の側からみたもので、桜が満開の頃は、向こうが見えないくらい、咲き誇っている。

右下の写真は、ある年の南寮の出し物である。一高の学園祭である「紀年祭」では、各寮ごとに競って趣向をこらした。「来雲何襲」というタイトルの横断幕が寮の壁に貼ってある。中国の物語なのだろうか。巨大な張りぼて（龍？）をバックにして、学生たちはいろいろな動物の仮面をかぶって立っている。当時の一高の学園祭の雰囲気をよく出している。

6-5. 8寮の部屋割



『向陵誌』には、各建物の部屋割りが描かれている。これをもとに部屋数を計算すると、次のようになる。

表 各寮の部屋数

	部屋数		
	1階	2階	計
明寮	13	13	26
西寮	13	13	26
東寮	12	12	24
和寮	12	12	24
朶寮	6	6	12
北寮	10	10	20
中寮	10	10	20
南寮	10	10	20
計	86	86	172

1部屋6名として、172室で1032名収容できる。

6-6. 寮の寝室

寮の寝室と不時点検

1913年(大正2年)

枕を並べて寝ている学生

私物を入れるこおり



屋根の傾斜

見回り点検をしている学生

出典: 第一高等学校ホームページ

当時の学生はどんな寮生活を送っていたのだろうか。

この写真は1913(大正2)年の寮の寝室である。

5人の丸刈りの学生がおとなしく寝ている。文字通り枕を並べて寝ていた。せんべい布団である。棚には、私物を入れるこおりや衣類が無造作に置かれている。壁は木造である。屋根裏部屋のように、屋根の傾斜がそのまま見えている。

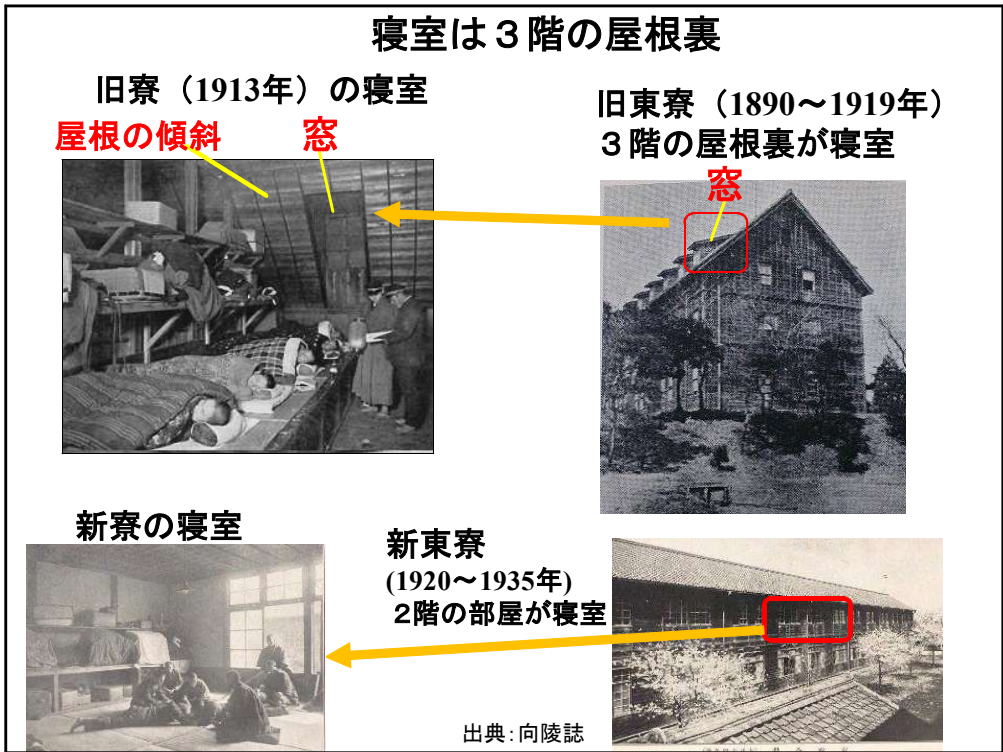
貧しい時代の青春であった。ちょうど100年前である。私はこの写真をはじめて見た時とても驚いた。東大の教養学部の授業で旧制高校の話をする時、学生たちが最も驚くのはこの写真である。今の時代からは考えられない。これほどプライバシーのない生活に今の学生は耐えられるだろうか。ちょうど中学・高校の修学旅行の旅館での雑魚寝のような生活を、旧制高校の学生たちは3年間毎日続けていた。

私が旧制高校に関心を引き寄せられたのは、この写真のインパクトであったといっても過言ではない。

不時点検

寮では無断外泊には厳しく、「不時点検」という見回りがあった。この写真はその時のものである。よく見ると、点検役の学生が立っている。ベッドより一段低くなった床で、2人の学生が、提灯をもって見回り、学生のリストをチェックしている。学生帽をかぶり、ひとりは学生服を着ており、もうひとりは袴をはいている。まるで監獄のような生活である。しかし、このようなプライバシーのない環境だからこそ、彼らは一生涯続く友を作ることができたのである。

6-7. 寝室は3階の屋根裏



左上の写真の1913（大正2）年当時は、旧寮と新寮が併存していた。古い3階建ての建物では、3階の屋根裏部屋が寝室であり、新しい2階建ての建物では、2階が寝室であった。

この左上の写真は、旧寮と新寮のどちらだろうか。おそらく前者であろう。

その理由は、第1に、屋根の傾斜がそのまま見えており、明らかに屋根裏部屋である。

第2に、外に飛び出した窓の形である。右上の写真は旧東寮であるが、この3階部分の屋根裏が寝室である（写真を見ると、屋根裏といっても部屋の高さは相当高い）。この建物の3階は、傾斜した屋根になっており、外に飛び出した四角の明かり取りの窓がついている。この窓の形が、左上の写真の窓と一致している。

旧東寮は1919年に取り壊され、1920年に新東寮が建てられた。新東寮は、右下の写真に見られるように、屋根裏は利用されていない。2階の寝室の内部を見ても、左下の写真のように、ふつうの畳しきの和室となっている。新寮では、さすがに学生を屋根裏に寝かせるということはしなかった。

寮内の盗難事件

寝室の棚には、私物を入れるこおりや衣類が無造作に置かれているが、不用心である。

寮の中では、盗難事件も多かった。ニセ一高生やニセ帝大生が校内に潜り込んでいた。『向陵誌』には、寮内盗難事件の場所や盗難物の統計も明らかにされている。

表 寮内盗難事件 盗難場所

盗難場所	件数
自習室・不在中	46
就寝中	30
寝室・不在中	17

表 寮内盗難事件 盗難物

盗難物	件数
教科書	113
辞書	111
その他の書籍	24
金銭	18
服	16
時計	15
写真機	13

6-8. 寮の生活 自習室など

寮の自修室

自修室



消灯後の「ロー勉」



出典: 第一高等学校ホームページ

出典: 『向陵誌』

旧寮の自修室



旧寮の自修室



出典: 『向陵誌』

前述のように、3階建ての旧寮では、2階が自習室であった。2階建ての新寮では、1階が自習室であった。


左上と右上の写真は、旧寮の自習室である。4人掛けの机である。机の中央に簡単な本箱がある。右下の写真は、新寮の自習室である。6人掛けの机である。対面の間に低い仕切りがある。

夜のロー勉

左下の写真は、「ロー勉」の様子である。電灯は4人にひとつしかなく、夜10時になると自習室の灯は消されるので、あとはローソクの灯で勉強する。これを「ロー勉」と呼んでいた。


6-9. 食堂

食堂





炊事場

賄征伐



食堂





出典 『向陵誌』

キャンパスの北の端に、食堂や浴場など、寮の生活施設がある。

食堂

左下の写真は、寮の食堂である。大きなテーブルを囲んで、多数の学生が食事をしている。部屋の向こう側は霞んでよく見えないほど広い。

賄征伐という学生運動

旧制高校では、賄征伐（まかないせいばつ）という学生運動がおこった。寮の食事は、賄業者によって運営されていたが、食事の内容や量について不満が募り、大声で騒いだり、暴力事件をおこしたりすることである。

正岡子規は、1891（明治 24）年に寮で賄征伐をおこなった。その時の様子を随筆『筆まかせ』に記録している。それによると、食事の内容が貧弱で不満を持っていた子規は、同級生と示し合わせて賄征伐をおこした。ご飯を大量に食べ、ご飯に難癖をつけては、机の上にひっくり返したりしているうちに騒乱状態になり、学生と賄の職員の間で暴力事件がおこり、子規たちは大挙して職員に詰め寄った。この事件によって生徒 11 人に停学処分が下された。しかし、子規は何の処分も受けなかったという。子規は、カンニングで大学予備門に合格したり、英語が苦手で落第したり、けっこういい加減な学生生活を送ったようだ（第 1 部一橋キャンパス編を参照）

また、1906（明治 39）年には、一高で賄征伐があり 3 名が負傷する事件があった。

自炊制度へ

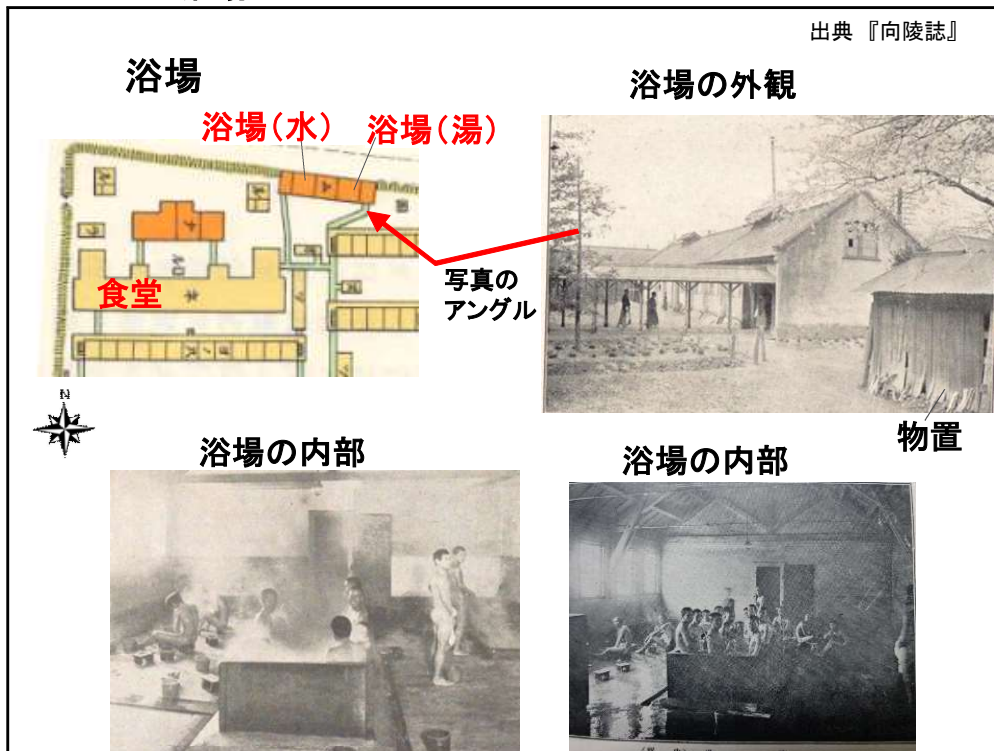
こうした賄征伐が多くなると、賄業者に任せるのではなく、自炊制度を取り入れて、学生自身が献立を決めたり調理したりする学校が多くなった。一高では、1919（大正 8）年に、賄請負制度を廃し、自炊制度を開始した。

炊事場

左上の写真は、炊事場である。この写真を見ると、学生たちが食事の用意をしている。和服を着た学生たちが、台の上で野菜を切ったりしている。つまり、1919 年からは自炊制度となり、学生がみずから炊事したようだ。

キャンパスには「給仕宿泊所」という建物があるが、業者による賄制度の名残のようだ。

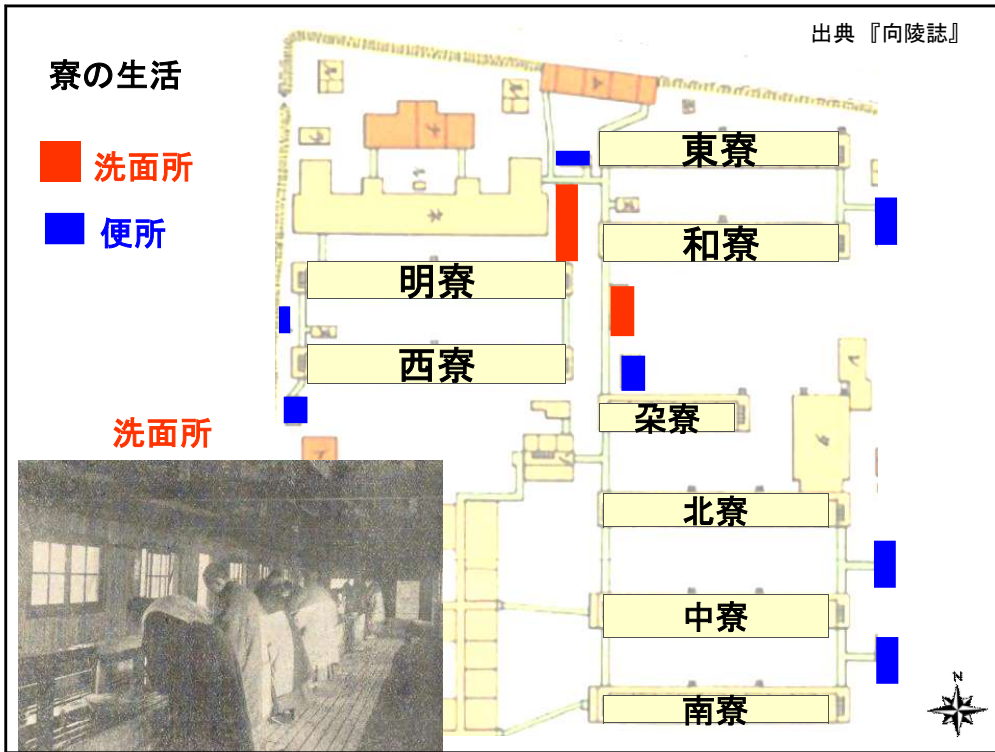
6-10. 浴場



右上の写真は、寮の浴室である。

地図上では、「水」と「湯」の部屋が分かれている。水浴と湯浴が分かれていたようだ。

6-11. 洗面所・便所



洗面所は、地図に示すように、2箇所しか設置されていない。

左下の写真は、洗面所である。吹きさらしの細長い小屋に、板のすのこが敷いてあり、水道の流しがある。その前に、どてらを着た学生たちが7~8人並んで洗面している。

便所は、寮エリアには7カ所設置されている。8寮あるので、1寮に1箇所ではなく、複数の寮で兼用である。

(トイレの位置を見ていて気がついたが、分館の周りにはトイレがない。1~2年生は授業の間にどこのトイレに行っていたのだろうか?)

6-12. ストームとコンパ



旧制高校といえば、ストームで青春を謳歌する姿がイメージされる。ストームは、1898年頃から、旧制

高校の寮で始まったという。学生寮では、深夜のストームもあった。別の寮で寝ている学生をたたき起こして回る。

左上の写真では、部屋の外から集団が入ってきて、大騒ぎをして、寝ている学生を起こしている。立っている先輩は、下駄を両手で持って、高歌放吟している。寝ている下級生は、手で防御して、嫌がっている。今なら「いじめ」とか「パワハラ」に当たる。

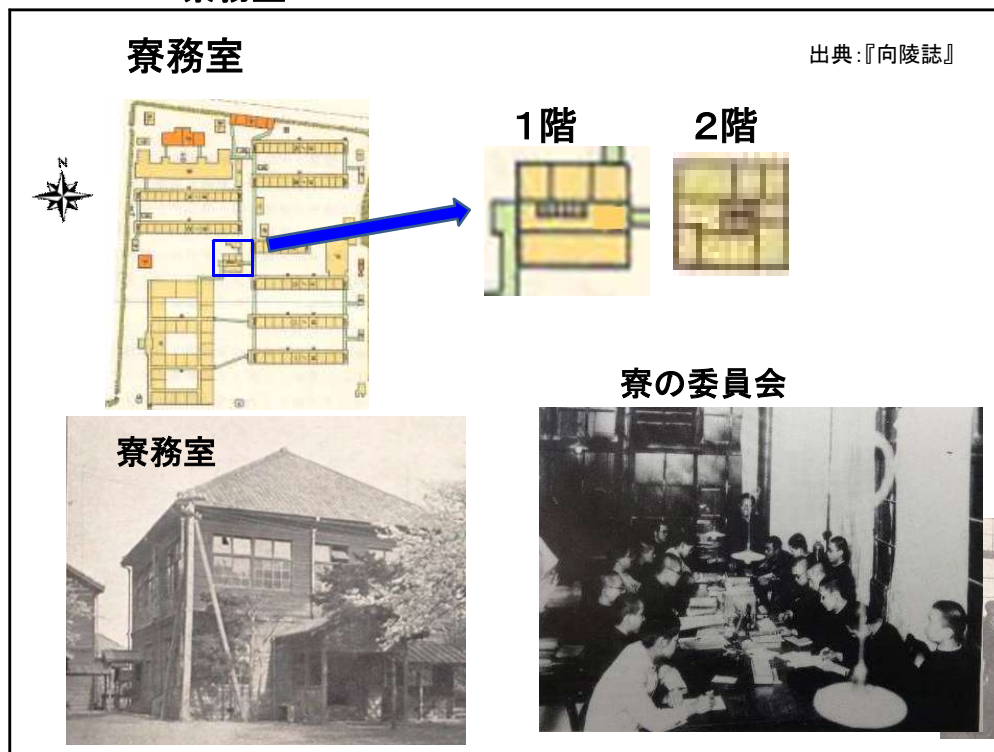
右上の写真でも、他寮の先輩が、旗を振りかざして入ってきて、寝ている下級生を起こし、周りで踊っている。起こされた下級生は、呆然とみているだけである。

コンパ

コンパは、親睦会のことである。学生たちは飲酒は禁止されていたので、食べ物や果物などを持ち寄って、集まっていた。左下の写真では、坊主頭の10人の学生が輪になって、夜にテーブルの上で果物らしきものを仲良く食べている。

また、右下の写真は「全寮コンパ」で、全寮生が嚶鳴堂（おうめいどう）に集まって、食事をしている。学校では禁酒だったので、おそらく酒は出ていなかったと思われる。

6-13. 寮務室



寮務室は学生寮の事務をおこなう建物である。生徒監室とも呼ばれた。

場所は、分館（教室）と寮をつなぐ位置にある。学生が授業を終えて、渡り廊下を使って、寮や寮食堂に向かう時は、必ず寮務室を通る。

左下の写真が寮務室の外観である。木造2階建ての建物である。寮の建物が長屋のようなダラッとした建物であるのに対し、寮務室の建物は、立方体の上に、三角錐の尖った屋根が乗っている造りであり、見ると少しピリッとする。寮務室は寮生の生活を管理し統制をとることが仕事なので、このような鋭く尖った印象が必要とされたのかもしれない。

4-2の「分館の外観」の写真に写っているが、分館が平屋なので、寮務室は高く見える。また、3-9の写真においても、寮務室は、他の2階建ての寮より高く造ってあることがわかる。

建物を上から見ると、正方形をしている。平面図によると、1階は廊下をはさんで4室、2階は6室がある。

右下の写真は、寮の委員会の写真である。16人の坊主頭の学生が、会議をしている。8の寮からそれぞれ2名ずつ代表が出ていたのかもしれない。後述のように、寮は学生の自治によって運営されていた。

6-14. 寮歌『嗚呼玉杯に花うけて』 「五寮の健児」とは

旧制高校といえば寮歌や応援歌が有名であるが、とりわけ一高の寮歌はよく知られている。毎年、各寮ごとに新しい寮歌が作られたという。最もよく知られているのは『嗚呼玉杯に花うけて』である。この曲の作詞は矢野勘治、作曲は楠正一である。

嗚呼玉杯に花うけて
 緑酒に月の影宿し
 治安の夢に耽りたる
 栄華の巷低く見て
 向ヶ岡にそそり立つ
 五寮の健児(けんじ)意気高し

なぜ五寮の健児なのか？

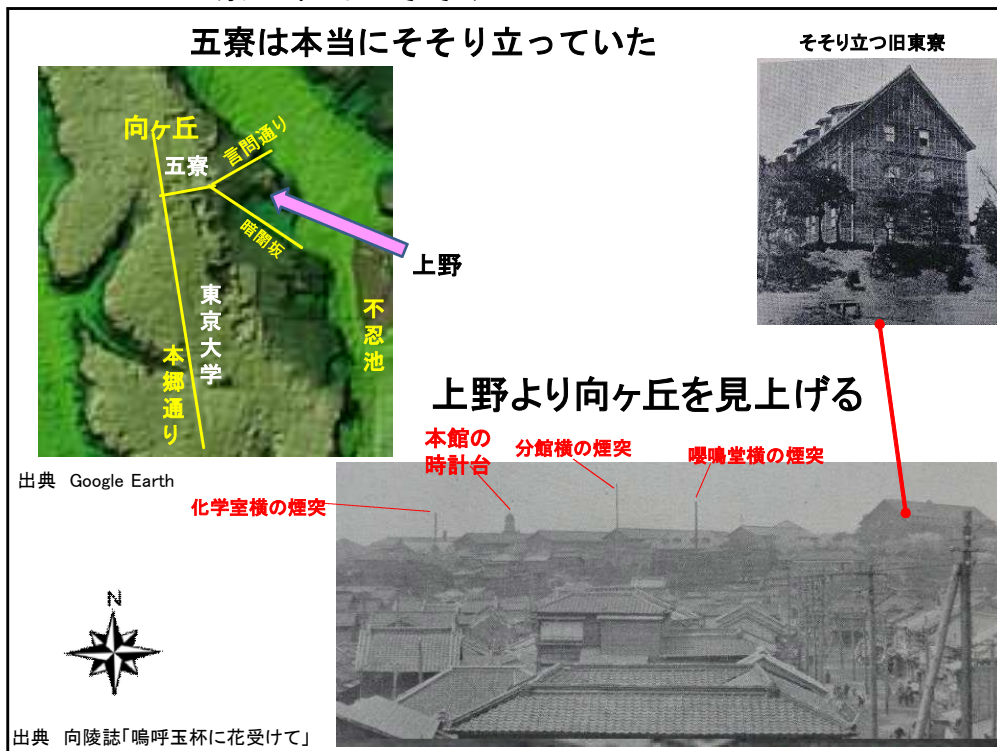
この歌詞には「五寮の健児」とあるが、寮は8寮あったはずである。なぜ「八寮の健児」ではないのだろうか。

この謎は、寮ができる過程を調べるとわかる。6-2の表に示すように、いきなり8棟になったわけではなく、6段階を経て完成した。

この表を見ると、なぜ「五寮の健児」だったのかのナゾは解ける。寮歌『嗚呼玉杯に花うけて』は、1901年に作られたものであり、当時は「五寮」であったからである。前述のように、五寮時代は、意外にも、たった5年しか続かなかった。14年続いた6寮時代や、15年続いた8寮時代があった。「五寮の健児」の時代は、一高の長い歴史の中では、むしろ例外的な時期といつてよいだろう。

作詞した矢野勘治が、もし1年早い1900年に入学していたら、「四寮の健児」という歌詞になったであろうし、もし4年遅いく905年に入学していたら「六寮の健児」と歌われたはずである。

6-15. 五寮は本当にそそり立っていた



『嗚呼玉杯に花うけて』には、「向ヶ岡にそそり立つ五寮」という表現がある。しかし、本当に五寮はそそり立っていたのだろうか。今の東京大学農学部に行ってみても、正門から入ると、キャンパスは平坦であり、一高の寮だった場所が高台になっているわけではない。

このナゾは、地形図を見るとわかる。左上の地形図からわかるように、一高のあった場所は本郷台地であり、東側には、不忍池をはさんで上野台地である。「向ヶ丘」という名前は、上野の丘(忍ヶ丘)から見て「向こう」にあったのでつけられた。低い不忍池から見上げると、向ヶ丘は高台にあり、一高の校舎はそそり立っていた。

実際にそのことを示す写真がある(右下の写真)。これは上野の丘から対岸の向ヶ丘を見たものである。一高の本館の時計台や、「化学室横の煙突」、「分館横の煙突」が写っている。この写真から、一高の校舎や学生寮(五寮)は、確かにそそり立つ印象を与えている。



また、右上の写真は、旧東寮であるが、3階建てだったので、確かに、近くから見てもそそり立つ印象である。近くの暗闇坂や言問通りの坂から見上げると、実際に寮はそそり立っていたに違いない。

6-16. 「栄華の巷低く見て」の地形的意味

「栄華の巷」の地形的意味 作詞: 矢野勘治 作曲: 楠正一

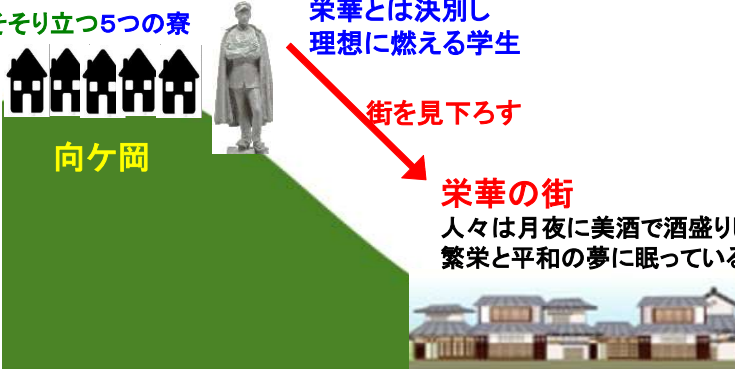
一高寮歌『嗚呼玉杯に花うけて』

嗚呼玉杯に花うけて
緑酒に月の影宿し
治安の夢に耽りたる
栄華の巷低く見て
向ヶ岡にそそり立つ
五寮の健児意気高し



出典 一高ホームページ

そそり立つ5つの寮



**栄華とは決別し
理想に燃える学生**

街を見下ろす

栄華の街
人々は月夜に美酒で酒盛りし、
繁栄と平和の夢に眠っている

このような地形を頭に入れると、寮歌『嗚呼玉杯に花うけて』の意味がよくわかるようになる。この曲の作詞は矢野勘治、作曲は楠正一である。右上の写真は、晩年のものであり、この曲を作ったのは、ふたりとも学生であった。この曲には、当時の学生のナマの感情が出ているのである。歌詞を図解してみると、左下の図のようになる。

向ヶ丘には、5つの寮がそそり立っている。ここに学生（健児）が住んでいる。眼下には街があり、学生はそれを見下ろしている。学生は、そうした繁栄の街を見下ろしながら、俗世間を超越しようと高い理想に燃えている。酒の杯に月を写し、桜の花びらを杯にうけながら。

この歌詞で、緑酒を飲んでいるのは「健児」なのか「栄華の巷」なのかで論争がある（秦郁彦『旧制高校物語』）。玉杯で酒を飲んで意気軒昂なのは学生であるという意見と、そうではなくて、酒を飲んで繁栄と平和を楽しんでいるのは「栄華の巷」の社会のほうだという意見がある。どちらでもよいが、私は前者をとりたい。「緑酒」とは、緑色に澄んだ酒のことで、美酒をさす。

エリートたらんとする一高生は、俗世間から超越しようとしている。上から目線のエリート主義ではあるが、自分が経済的社会的に良い思いをしたいという自己中心的なものではない。むしろ一般社会の繁栄や平和には背を向けて、理想主義を貫くという禁欲的なエリート主義である。当時の旧制高校生の心情がよくあらわれている（ここには後述のような木下校長の籠城主義の影響がある）。

谷の下には根津遊郭や歓楽街があり、そうした俗世間から超然としているという意味もあった。この歌が一高生の心を捉えたのには、そうした地形的な理由もあるだろう。

このような上からの心情と、下の街を見下ろせる向ヶ丘という場所はぴったり合うものだった。前述のように、江戸時代から湯島聖堂（昌平坂学問所）は本郷大地の上に作られたのと同じである。

もし、逆に一高が谷底にあり、俗世間を見上げる地形であったら、このような「上から目線」の寮歌はできなかっただろうし、できたとしても、それほど一高生の心を捉えなかっただろう。

以下、未完

7. 向丘キャンパスの歴史

8. 今に残る一高向丘キャンパス

<参考文献>

一高同窓会『向陵誌』1913年,1925年,1930年,1939年 国立国会図書館デジタルコレクションで閲覧可能
西沢信編『嗚呼玉杯に花うけて：写真図説 第一高等学校八十年史』講談社 1972
木下直之, 岸田省吾, 大場秀章『東京大学本郷キャンパス案内』東京大学出版会 2005
原 祐一 (2010) 「水戸藩駒込邸の研究 藩邸内外の景観と造園の検討」東京大学史紀要、28、41-63.
旧制高等学校資料保存会監修『白線帽の青春 (東日本編)一写真図説・旧制高等学校』国書刊行会 1988
秦郁彦『旧制高校物語』文春新書 2003
旧制高等学校資料保存会編『資料集成 旧制高等学校全書 (全8巻)』昭和出版 1981
篠原央憲編『わが青春・旧制高校』ノーベル書房 1969
週刊朝日編『青春風土記 旧制高校物語 1』朝日新聞社 1978
松浦濤人 『ああ青春よ我にまた 旧制高等学校碑の旅』国書刊行会 1996

<参考webサイト>

旧制第一高等学校ホームページ <http://museum.c.u-tokyo.ac.jp/ICHIKOH/index.html>
『華麗なる旧制高校巡礼』 <http://qsay55.starfree.jp/1stmuko.html>
国立国会図書館デジタルコレクション <https://www.dl.ndl.go.jp/>
「今昔マップ on the web」埼玉大学教育学部 谷 謙二 (人文地理学研究室) <http://ktgis.net/kjmapw/>
Googlemap
Google Earth

第3部 キャンパス交換編に続く

●元に戻る

<http://tannoy.sakura.ne.jp/>